

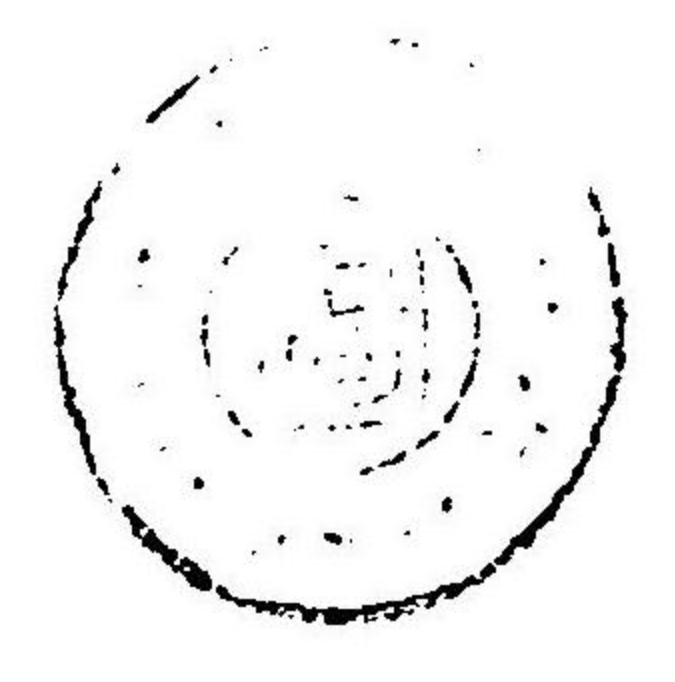
上 35 34

253-57

精 類

神 教 育 之 音

漢 書 卷 九 十 七 上



心
神

至
誠

戊戌首夏

通雅



序

大易不言有無。言有無。諸子之陋也。一條妙理。貫通宇宙。不有不無。則有則無。吞吐乾坤。殺活萬有。仁者見之。謂之仁。智者見之。謂之知。倫常因是以立。道義因是以全。聚亦其體也。散亦其體也。而世人不

察。觀其聚者。謂之自無而有。創造之說。是已。觀其散者。謂之自有而無。寂滅之教。是已。言之善巧方便。則可矣。言之本來面目。則我未知其可也。川崎又次郎。篤學之士也。從學蒼海副島先生者。數年于此矣。今茲。抄出其語錄中切實世道

人心者若干條。以公之于世。乞余一言。書中有有無之說。蓋道學之蘊奧也。其精神骨髓。粗與鄙見合。乃書數言。以爲序。併質之蒼海先生云爾。

明治三十一年五月

無邊 渡邊國武 識

緒言

一 余先生ノ門下ニ遊ブコト、茲ニ年アリ、先生余ノ不肖ヲ棄テ給ハズ、懇勸懇到、垂教ノ誠、深ク肝肺ニ銘シ寤寐ニ思服シ、以テ至恩ニ應ヘンコトヲ期スト雖、余ノ不敏ナル、未、躬行ノ効ヲ見ル能ハズ、日夕以テ憂ト爲ス、豈又、之ヲ他人ニ語ルニ遑アラムヤ、然ルニ、先生ノ高風ヲ欣慕シ、一タビ講筵ニ陪シ、薰陶ノ德ニ浴センコトヲ望ミ、會余ガ門下タルノ故ヲ以テ、謁ヲ執ルコトヲ得ント欲スル者甚多シ、依テ、茲ニ、講筵筆記ヨリ、教育ニ關スル講話ノ數節ヲ抄録シテ、一冊子トナシ、出シ以テ同志ノ士ニ示ストイフ。

一本書、教導、感化以下、各部門ヲ分ツト雖、特ニ、各題目ニ就
キテ教ヲ請ヒシニハ非ズ、法言ノ中ヨリ抄出セシモノ
アリ、雜話ノ中ヨリ摘録セシモノアリ、故ニ、前後交錯シ
テ、序列、未ソノ躰ヲ得ズ、唯、暫、類ヲ分カナテ、誦讀ノ便ヲ
圖レルノミ。

一先生ノ片言隻語、脉絡系統、自、整然タルモノアリ、是皆、先
生創見ノ學說ヨリ來ル、故ニ、語甚近易ナルガ如シト雖
其ノ旨意、高遠該博、殆、究極スル所ナシ、冀クハ、讀者、心ヲ
潛メ思テ、政シ、其ノ要領ヲ得ルニ至ランコトヲ。

明治三十一年六月

川崎又次郎 識

精神教育 目次

第一編	教導	一
第二編	感化	三一
第三編	日本の教育	四九
第四編	日本の歴史	六七
第五編	無有	八五
第六編	觀道	一一一

附 錄

第一 蒼海先生詩文

一三五

第二 副島大使適清概略

一六五

精神教育

副島種臣先生講話 門人

佐々木哲太郎 校
川崎又次郎 輯

第一編 教導

方今、世道ノ振ハザル、學生ノ風氣、萎靡頽廢シテ、
復タ收拾スベカラザルニ至ラムトス。精神教育
ノ重ズベキ、實ニ今日ヨリ急ナルハナシ。流弊ノ

源、蓋師者、自先ツ、子弟ノ精神トナルコト能ハズ
 シテ、徒ニ、口舌ノ末ヲ粉飾シ、以テ、他ノ精神ヲ鼓
 舞セムトシ、子弟ハ、其ノ師ノ平素指導スルトコ
 ロハ、皆、空理空言ニ過ギズト思ヘルニ在リ、宜ナ
 リ、其ノ弊ノ馴致スル所、コ、ニ至レルヤ、且夫、初
 等教育ニ於ケル教育學管理法ノ如キ、之ヲ講ズ
 ル者、日ニ愈多キヲ加フルト共ニ、形式ニ拘泥ス
 ルコト、亦愈深ク、甚シキニ至リテハ、教案ハ脚本
 ノ如ク、講堂ハ劇場ニ異ナラザルモノアリ、カク
 ノ如クンバ、師者、扮戯子ト擇ブナシ、許多ノ藝能

ヲ扮シ得テ是當ス、其ノ間、焉ソ、心ヲ以テ心ヲ養
 フノ餘地アルヲ得ムヤ。

夫子ノ教育ヲ語ル、言簡ニシテ旨該シ、師者、之ニ
 依テ、修養怠ラズンバ、精神教育ノ要ヲ得ルニ庶
 幾カラムカ。

教育といふことは、易いやうにして、まこと六ヶしいも
 のと、拙者も思つて居る。以前は、士族などの家では、やれ忠
 義とか、武勇とか、左様なことをしては武士に不似合とか
 言つて、子供の時から、武士々々といふ字を出して教へて

居つた、うこそ、廉恥とか何とかいふことは、子供の時から
じて知るものであるから、幾何く肺肝に自然と銘すると
いふこともある、うれから門を出て、學校にゆくやうに
なつてからは、自分でも考へてみると、有力者の教を受
る時は、其の有力者の精神が、此方に徹するやうにある時
は、よく覺ゆるやうであつた。忠孝といふことも、仁義と
いふことでも、何でもの通りであつた。又、書生に侮らる
るやうな教育者がやる時は、どたいから、此方が聞くまい
と思つて居るものであるから、一向、其精神が貫徹せぬ、
こそ、理屈よりも、その精神が肺肝に銘するやうにせねば

ならぬ。肺肝に銘せねば、何にも効がないやうになる。以前
の學者は、實際は、さうであつたかどうか知らぬけれども、
菟に角誠意誠心を以て顯れた人が、澤山あつたが、近來は、
寥々と夜明けの星のやうに、誠意誠心を以て顯はれた人
がない。矢張、文章を作るとか、詩を作るとか、いふだけの話
である、うこそ、なか／＼精神教育などいふことは難い……

以前は、大凡、學問をさせる時は、村夫子へ子供を遣るにも、
やはり、親孝行をするやうにとか、たとなくするやうに

とかいふところでやるものであるから、それで、自ら、精神を育て、心を造り直して呉れるといふやうなことであつたと思はるゝ。今のやうに、別段、精神教育など言つてやかましく言つたのではあるまい。導く人が、我が精神に會得する所で、何時の間にか、肺肝に徹するやうに、克く柔に、克く剛に、そつは、講義して、教へ導きて行くといふわけであつたのであらう。是れこそ、教師は、餘程、精神を以て教へられねばならぬ……

教へる時に、暗誦するやうな心持ちでやれば、教へらるゝ人の心に徹せぬ。自分が一語言ふときは、自分も、研究して、自分にも遣らふと思ふて教へねばいかぬ。そこで、昔の語に、惟、教學半と言つて、教ふる時は、半分は、自分の學問するといふ心あひで教へねばならぬ。それを、うはの空に暗誦するやうな心持ちで、口先きはかりでやつて見やうか、精神は徹しない。其處から先きは、教育家其人に存すといはんが如き所があるによりて、なかく、易いと言はふか、難いと言ふかといふは、其處である……

何事でも先づ、我身に行ふて見せると、一つ宛、我が精神を
向うの精神に徹し、さすことが出来る、うこそ、はじめ、向
うの精神を變化さすると出来る……

門生弟子たち、學校の子弟でも、心を煉らふと思ふ時は、師
たる者は、言々語々言葉に注意して言はねばならぬ、兎も
角も、向の精神を引立て、引廻はしてやるやうに注意せ
ねばならぬ、うれば、心から精神から仕直したいといふく
らいにやらなければならぬ……

人の性質は、これと異つてをるものであるから、之を誘
導する法も、決して一樣には行かぬ、孔子も、その弟子の一
人々々によりて、各うの間に答へが差ふ、顔淵は顔淵、曾子
は曾子と、夫々に誨へかたが差ふて居つた、誰も彼も、皆一
様に誨へやうとして、は、届くものでない……

曾て驗して知つたことかある、凡人には、眼の附け根で記
憶する人と、耳の附根で記憶する人の別がある、眼で見た

ものでなければ覺ゆる人があれば、又、女とか、或る一種の人は、耳から入れば、直きに受取りが出来る。仮令は、人が歌を謠ふて門前を過ぎるのが、一寸耳に入ると、直に覺ゆるけれども、書いたものを讀んだのでは、一寸も覺ゆるれは、則、耳で記憶すると、目で記憶するとの別である。眼の働きの強ひ人は、直く敏捷に智慧が出て来る、耳の働きの強ひ人は、聞たことを胸に考へて謀て見る。そこで、書生たちは、耳の利かぬ人は、一寸、初は覺ゆるにくひ、本を教ふる時、音調だけを覺ゆる人は、直くに覺ゆるが、目で覺ゆるやうとすれば、暇を取るが、後には役に立つ。幼稚から、覺ゆるがよいと

か悪いとかいふけれども、何處かの作用で、覺ゆることは必ず出来る。此の子は、何處であるから、何處でどういふやうにやらせるが宜い、といふやうにせねばならぬ、.....

古の學者は、人は萬物靈なりといふことを主として、人の禽獸に異つた點を専らに講究したけれども、今の學者は、概皆、人と禽獸と同じき處ばかりを務めて説明するやうである。うれから色々な説が出て居る.....

物好きに利己主義などいふことを究め居ると自ら好んで我が身を禽獸に陥れるものであるから、餘程注意されぬと、嘗て人を過るはかりであるまい……

どうか善をさせて下さるやうにと祈ればこそ善をすることが出来る。此の心が自づと人を高くするのである。……誠祈る心から言はぬと、人も禽獸も同じことになる。……誠忠無二なる楠公でも、常に祈て居られたと見ゆる嘗て、河内國の水分神社といふに、楠公の祈願の歌

ひさかたの天つ日嗣のやすかれと

祈るは國のみくまりの神

といふのがあると聞いた……

一切萬事有ると思へば、何でも有る無いと思へは何にもない。不誠無物といふも、この意味である……不誠無物の一語は、この上もない高妙幽幻なものであらふ。誠者物之終始ともいふてあつて、一切の事、此の一語の外に出づることはない。天人相感する道理の如きも、今時の學者風

に言へは、左様なことは、一切無いといはふけれども、自分
から、その感ずる所のものを打ち消してゆく者には、感じ
やう苦もあるまいたゞに、それのみではない、若し、一の誠と
いふものが無い時には、君臣も無れば、父子もなく、朋友も
なく、國家もなく、神明もなると言はんが如きものである……

拙者が童の時の、佐賀の學校は、藩士の子弟を教育する所
で、寄宿の生徒は、朝晩は武藝を教へられた朝、明け六つと
いふ時から起きて、夜の四つ時、今でいほうなら十二時に

ならぬと寝ることにはならぬといふことになつて居つて、拙
者は、十五の時から寄宿したが、廿五歳の時迄寄宿して、それは
勉強した休日と雖も、自宅に歸つたことにはない位であつた。
そうして、賄の仕方は、朝飯は香の物といふて、澤庵漬のこ
とたるれを四切れづゝで飯を食ふ、晝は、茸蕪か豆腐を半
切れづゝ、夜は計り飯と言つて、校僕が升つて出す飯を、二
杯たけ、塩を掛かけて食ふので、七日に一度くらひ鯖の煮
付のやうなものを食はせられた。今のやうに、滋養物でな
ければならぬとか、何とかいふことは、聞いたこともない。

教ゆる人も導かれる人も、始まりから情愛を存して居らねば、師弟と云ふ様を譯にいかぬ。今日の教育は基礎の立たぬ上に、家屋を築いたり、壁を塗たりする様に見ゆるが、是も一般の事ならば致方がない。学校の規則は、大事なものと見えて、ケンブリッヅ杯の学校の如き、五百年六百年になるも、規則で無くて、業前が教育に成つて、言はゞ煙草の煙りの燻がした計りで放逐される。其れを吞まぬ。今は小學生徒も吞む。巻煙草と云ふ便利な物があるから、坐つて居ても、何處でも燻らさるゝ。便利な事であるから、学校では、餘程注意をなされぬと、煙草丈けでも、餘程の入費に

なるさう云ふ癖が附くと、今に不正な事まで始まる。獨り胸を悪くするとか、胃を損するとか云ふ計りでは無い。

人を教ゆるには、十分によきことと信じて、あまり、いつもく、一律にやつては却てその効能かないもの。た總体人間といふものは、如何なることにて、あまりしつこく、くどく行くこと、之に反對する念の起るやうになるもの。ある、この邊は、餘程注意されぬとやらぬ、親が甚しく好いた事でも、その子は、甚く、それを厭ふて、全く反對したと

いふやうなる例は、世間に少からぬことである。子弟の心はへ如何によりて、引き立てる加減が肝要である。悪さもので、叱るはかりでは、益々悪くする結果に至るものである。盗賊でも、汝は盗賊であると、正面から叱り付けると、決して心服せぬ。時によりては、喜はしたり、叱りたりするといふのが、最大切なる所であらう……

人を教ゆるには、愛を表はしてゆかなければならぬ。智の方は、以心傳心でゆくがよいものである。若し、愛を取除き

て、先づ智の方からはかり教ゆると、その結果は、面白からぬものになる。そこで人を教へようと思ふならば、先づ、心に充分愛を充たすことが大切である。然るに、世間多くは、智ばかり先きに立てるものであるから……

心で、真に愛する情があれば、不折合といふことは無い筈である。叱る時は、叱り散らして、愛の情がないに依つて、折合が悪くなる。これは、何時の間にか、我を敵として居ると感じて来る。叱つても、已を何處か愛して居ると見られる。

は。自。ら。治。ま。つ。て。來。る。う。こ。が。感。應。の。大。切。な。處。を。あ。る。……

人を治むる道は、人に下るといはうか、下ると言ても、無暗に頭を下げよと言ふではない。心で、天下の者を引受けて居るといふことである。表向き上の者は上の者をやつて居るけれども、下の者は、憐むべきものである。己が保護してやらふといふ、可愛といふ心を以て、嚴然として居るのが宜い。下るといふは、漫に禮ばかりせよといふではあるまい。可愛そうなものであるから、引立てて、行かぬといふ

氣味でやるのである。それを悟角になつては詰まらぬ……

孔子のことはの申で、一は面白いのは、出門如見大賓、使民如承大祭の一語である。これは、人には、必、うれ／＼に、一つの神さんが宿てござるものであるから、人を見るに、皆神さんと思ふて之に接し、唯一人の人足を使ふにも、その人足の頭にも、ちやんと神さんがござると思ふて、之を尊敬するといふの意味である。……祭をして、神を禮拜するといはうか、唯、空なることを考ふるよりも、人々に備は

は。自。ら。治。ま。つ。て。來。る。う。こ。が。感。應。の。大。切。な。處。で。あ。る。……

人を治むる道は、人に下るといふはどうか、下ると言ても、無暗に頭を下げよと言ふではない。心で、天下の者を引受けて居るといふことである。表向き上の者は上の者をやつて居るけれども、下の者は、憐みべきものである。己が保護してやらふといふ、可愛といふ心を以て、嚴然として居るのが宜い。下るといふは、漫に禮ばかりせよといふではあるまい。可愛そうなものであるから、引立て、上行か例といふ

氣味でやるのである。それを「脛角になつては詰まらぬ……」

孔子のことはこの中で、一は面白いのは、出門如見大賓、使民如承大祭の一語である。これは、人には、必、うれ、く、に、一つの神さんが宿てござるものであるから、人を見るに、皆神さんと思ふて之に接し、唯一人の人足を使ふにも、その人足の頭にも、ちやんと神さんがござると思ふて、之を尊敬するといふの意味である。……祭をして、神を禮拜するといはうか、唯空なることを考ふるよりも、人がに備は

る神を輕蔑せぬのが、一ばん肝要である……澤山な理窟
は知らんでも、此の一語さへ出来れば、それは立派なもの
だ。たつたこの一語でよろしい、それは、よほどありがたいもの
だ……

放心を求むといはるか、忠恕といはるか、みんな結構な語
に相違はないけれど、その言ひ方が、無形に説いてあるか
ら、一寸入りにくい、出門如見大賓使民如承大祭といふの
は、まことに切實なる言ひ方である。心を練るには、色々な

る語を研究するよりも、此れなら此の一語のみを、きめて
服膺すると、餘程進みが早からう……此の一語の服膺が出
来ると、天地と同躰になつて、餘程大きな量見の人となる
ことが出来る。註にも、心廣躰胖なりと書いてあるも、この
意である……此の一つが分りさへすれば、天地と全一躰な
る人となることが出来る。さうなれば、爲すことに、少々の
間違はあらふとも、君子たることを失はぬ……

出門如見大賓といふのは、一口に言はゞ、人を謾らぬとい

ふまでもある。さう人を見さへすれば、皆な、大賓とかなん
とかやつて居つては、たまつたものでない。仮令、人を呵る
といはふか、此者の頭にも、神は宿てござると思ふ所であ
る。

人には、勇氣が無くてもはならぬ。大勇氣が必要である。彼の
張良は、鐵槌を以て、秦皇を撃つただけの勇氣があつた。その
勇氣を修養して、狀良婦人の如きに至つたのである。あふろ
れで、あれほどの仕事も出来たのだ。その大勇氣がなくて、狀

良婦人の如きに至つたのでは、何にもならぬ。こゝらによ
く氣をつけて、歴史を讀むと、餘程益することがある。

大人と小人との別は、忘念雜慮をさうするとか、坐禪をする
とかいふのは、皆、小人のすること。に属する。天の仁愛を体
じて、寢ても起きても、如何なる處に居つても、何時も、神さ
まに對して居る心持ちで、神の心を以て、心として、万衆を
安んずるところ。こふことを企てるのが、所謂、大人の所業であ
る。養其小者爲小人、養其大者爲大人といふも、こゝらの意

味であらふ……………

孔子の大勇は、克己復禮といふところであらふ。己に克つといふことは、眞の大勇でなくては出来難い。吾嘗聞大勇於夫子矣、自反而不縮、雖褐寬博、吾不惴焉、自反而縮、雖千萬人、吾往矣、といふ語の自反といふは、則大勇である。千萬人といへども畏れぬといふのは、自反から來らなければならぬ。この自反といふことが大勇であるといふの證據は、自反して疾ましき所無ければ、青天白日の心持になる。則

上帝に對しても、毫も耻る所なしといふ處に至る。己に上帝に恥ぢず、況、千萬人をやといふ處である……………

復禮といふは、君には忠、親には孝、朋友には信といふやうに、人倫を外つるよことなく、すべての道を都合よくゆくことである。五倫といふものは、天地のさまり掟であつて、禮の大なるものである。禮に復るといふてもお辭義をよくすることではあるまい……………

克巳の工夫といふて、別には無い唯うの大なる筋道を立
 て、うづの大なるものに倚て居ると、其他の細かいことは、
 自然と之に従ふやうになる。事々物々、克巳とか何とかい
 ふて、平素細かいことばかりやつて居ると、氣が畏縮して
 しまふ。うこそ、大人先立乎其大者ぞ、大なるものを立つる
 が肝要であらふ。小人反之ぞ、小人は、菟角に、小を立てるか
 ら、従て大なるものが無くなつてしまふ……着物でも、うの
 領のところを持って上げると、全体がずつと正しく立つと
 いふたやうに、うの重なる處を執るといふが肝要であ
 らう……



凡て大なるものが立て居る人は、自づと天地を感せしむ
 るものである。高山でも、蒲生でも、大なるものゝ立つた人
 であつた。大なるものが立たば、自づと萬事が之に従ふも
 のであるから、詩でも歌でも、餘程面白い。高山彦九郎が薩
 摩に行くときに、關所の番人が、うこを通さぬと言ふた時
 に、詠た歌がある

薩摩人いかにやいかにかるかやの

關もとささぬ御代としらすや。

うれはもうよほど面白いものな、又、蒲生の詩に、

義勇楠河内 英雄柴筑前

二公誰可學 倚劍問蒼天

といふのがある、實に調の高いものた.....

凡天下に志あるものは何時でも、毅然として仁天下を蓋ふものがあるによつて天地と度を合するのである.....

第二編 感化

古ノ人ヲ教フル者ハ、徳ニ依テ、位ニ頼ラズ。今ノ師タル者ハ、學位又ハ、學力證明書ニ依リ、專奏任判任等ノ官位ヲ以テス。古ノ子弟ノ師ヲ求ムルヤ、負笈千里ヲ遠シトセザリキ。今ノ子弟ハ、其ノ郷里ニ在リ、師者、却テ千里ヲ遠シトセズシテ、往キ教フ。其ノ狀、宛モ主從ノ如シ。師道業已ニ淪ル、又、感化ヲ云フニ違ナシ。雖然、學校ノ制、時ト共ニ異

ナリ。君子ハ光ヲ和ケ、塵ヲ同ウス。言忠信行篤敬、
 雖蠻貊之邦猶行矣。苟其ノ頼ルベカラザルモノ
 ナ捨テ、依ルベキモノニ取り、已ニ反リ、内ニ求
 メテ、念々至誠息ムコトナクシテ、何レノ時、何レ
 ノ處カ行ハルベカラサルアラシヤ。夫人、自感シ
 テ、而シテ后ニ他之ニ感ズ。冀フ所ハ師者、自先ッ
 感ズルニアリ。

夫子ノ感化ヲ説ク、丁寧深切。教育者、一身ヲ以テ、
 萬世ノ風教ニ關スル所以ノ道。蓋之ニ外ナラザ
 ラムカ。

感化と云ふ事は、世に、其の味ひを嘗めた人が、少い。其一人
 に、仁の心が充分あると、相手の仁の心が、其れに應じて現
 はるゝといふもので、義の心が有れば、相手が、義の心を生
 ずる。其れが、自然の感化と云ふものである。彼の楠氏の時
 代には、武蔵相模の兵は、日本中寄つても之に當る者が無
 いと云ふ程強よかつたが、五畿内の兵は、鞭で打たれても、
 直ぐに斃れるといふ程弱い者として有つた。然るに、其鞭
 で打つても、斃れる弱い五百人の兵を、楠が率ゐると、楠の
 義勇の精神は、直に、五百人の兵士の心と爲り、日本中の兵

を引受けて宜いといふ武蔵相模の兵と戦ふて彼は散々逃げて楠の兵は一人も逃げたといふ事はない其れから世の考證家などが或は湊川の役とか兒島高德とかいふ者は嘘じやと云ふけれども死せる孔明生ける仲達を走らすといふ意味で其楠兒島の精神が維新の際に起つたものは此兩公の御蔭で有る其れを想像した許りて胸中に忠義の念が溢れたもので有るさういう様を譯のもので有る其れが感化と云ふ者である其處で靈魂死せずと云つても……一寸、晴易い所で言へば楠兒島の精神を知るに依つて萬劫未代志士仁人を起して行く足利尊

氏の爲めに奮い起つたと云ふ者は一人も無い……

上に在る人が仁の心を以てされる時は天下の人は仁の心を以て應ずる外國に對して膠州灣とか旅順口とかいふ如き止むを得ざる時に上の人が勇の心を以て天下の心を感じれば天下の人が勇の心を以て應ずる彼の日清戦争の時に陛下が行在所に於て殊の外御精勵遊ばされた故に一般の者が陛下の勇の御心に感したさうして満天下の人が勇の心を動かしたといふやうなもので

ある。そこで、智慧を出して、斯うしたならば、民が喜ぶたらう位なことをやつて行く時は、民も、やはり、邪推の智慧で應ずるから、一向に感せぬ。智慧と智慧で来る時は、互に相欺くばかりである……

。。。。。。
 靈魂は、死んで居るか、生きて居るかは、暫く措いて、一の立言から云へば、矢張生きて居るから、感化して居ると言つても宜い様なもので有る……此事を、一步進めて、幽冥論になれば、現に生きて居れば、生きて居ると爲る。靈魂と云

ふものは、天地の一部分と言つても、天地に充滿して居ると言ても宜い。其れが浩然の氣天地の間に塞かると云ふもの、何處でも照り渡つて居る、心有ると心無きと、悉く映照せぬと云ふ事は無いもの、其れで、楠の死んだ時でも、其首を、賊兵が、楠の郷里に送て遣つたと云ふ様を傳へがあらるものである。賊までも感ずる、是れが、道德のはやると云ふもの、其れで、亂世に居て、不幸に逢つた人が、世の爲めに成つて行く、太平の忠臣は、忠義の顯はれ様が無い、難に逢つた人の効能で、皆、人が感じて行く、支那でも同様で、伯夷叔齊とか、文天祥とか、諸葛孔明とか、皆、難に逢つた人を慕

ふて行く。太平の時の宰相は、どう云ふ事を爲したか、忠義も現はれぬ。其れで、功臣も世に顯はれぬ。我をして忠臣たらしむる勿れと言つた人がある。忠の顯はるゝ時は、國家不幸の秋である。其處で、天から言ふと、其れは運が悪かつたと唱へるけれども、運の善いと言つても宜い。其人から言へば、身。を。殺。し。て。仁。を。爲。し。幾。百。千。年。の。後。迄。も。人。を。奮。起。し。て。行。く。者。で。有。る。……

高山彦九郎の日記といふものがある。信濃の人で、林康之

といふが、其日記を持つて來て見せられた事が有る。粗末な紙に書いてある。其れに、高山が伏見を通つた時、伏見に戦氣が見ゆる。他日事の有るならば、伏見から始まらうと言つた事を書いて有る。然るに、御維新の際、伏見の戦争が第一着で有つた。偶然に當つて怪いと言ふけれども、感應の極度になると、さう云ふ事まで感應するものである。其處は、練磨の効能と云ふものか、天才の秀で居るに因てか、是は、事柄が雜駁に成つて行くけれども、廣く言へばさうで有る。宋の李綱といふは、李忠定と申された人であるが、丁度、其時に、洪水が有て、宋の都へ洪水が來た、其れを判

斷して、建白されて、五年にして、必ず、外國の兵が、此に来るに依て、御警戒を爲さへと言て上書した事がある、然るに、果して、金の兵が来た、其論は、感招と言つてある、是れは、人に感應するでは無いけれども、さう云ふ、感應とか、感招とか、感化とか、自然と、天地人相通する所の者が有る、其れを、今の學者的に言へば、さう云ふ理は無いと言ふであらう、大凡、物事、無いと思つて考ふれば、凡て無い、注意せぬ故に、打消して行くものであるから、感ずる種を自ら滅して行くのである……

又、感招の理は、豫て言ふ通り、信長が一人、尾張に起ると、秀吉とか、蒲生とか、誰とかいふ様な有名な人は、悉く尾張から起つた、家康一人、參河から起ると、天下を定むるに足る技倆の輩が、矢張、參河から起つた、何時の間にか、大將の精神が通じ合て、人物が出来る、と見ゆる、其處で、又、悪い時になると、南朝の滅びて、足利と爲てからは、人物と云ふ人物は、天下中搜して、似た者も無い、エーヤツト、豪傑らしい者、北條新九郎杯と云ふ人が出て来てから、天下中、復た自然と、人材が出来て来た、何處でも、悪い時になると、眞に悪い、支那の歴史を見ても、其通り、支那でも、後漢の節義の教育

を受けて、三國と爲る時の際は、滿天下何處を見ても、英雄の種許りである、其れから一つ變り、魏の曹操の代になる、と、又悉くいかぬ者許りに成て來る、所謂一家仁、一國興、仁一家讓、一國興讓、一人貪戾、一國作乱、其機如此、とは此邊の意味合た、……………

かまぐる」と云ふが、日本の古語である「かまぐる」と云ふは神來ると云ふ事で、自分に心が有らは、天地の氣が、其處に來ると云ふものである、此の語を創めた人は、感應の理を

はつきと知つて居たであらうと思はれる……………

孔子が人を育てるにも、自然と言はず語らずの中に、感化する事が多かつたらふ、其處で、孔子の最も面白き所は、郷黨の篇で、寢たり起たりする際に、自ら人が感化して行く、其處で、学校の教員たる人達は、已を慎むが第一である、口頭で幾ら言つても、自分が不徳義であれば、門生等は、逆も感ずると云ふ事は無い、金錢と教育と交易して居ると言ふだけである、其處で、學校でも風習が有つて、何處の學校

が宜い生徒が出来る、何處はいけないと云ふ、是は、一の善
い感招と、悪い感招と有るに因て、善惡の差が有ると見る
る.....

天下を平かにせんと欲する者は、家を齊へ、身を修め、心を
正うすると云ふ所から遣つて行くと云ふが、一の感化の
理である。さうして、家に居る時から、慎で行かねば、どうし
てもいかぬ、此の信と云ふものは、已が三日善ふなつたか
ら、さう思て呉れと言つても、人は信せぬ、三年五年十年續

かねば、天下が信せぬ、信せぬは感化はしない、其處で、信義
と云ふ信の一字、最も慎まねばならぬ、一事信を守つたと
言はふか、豫て、彼奴はと見らるゝ所が有ると、どうしても
信せられぬ、其處が、古賢人の心を用ゐて居つた所である、五
年十年、續かる丈けに、身を修め、心を正うすると云ふ所が
あると、彼は信義を守る人と言ふ事に見らるゝ、さうする
と、相對せざるも、其名を聞いた許りで感化すると云ふ事
になる、天下を治むるには、一人一人に逢て言ふ事は出来
ぬ、一人丈けの感化は、三日五日懇意になつて出来る事も
あらうが、天下を感化する事は、一人一人に逢はぬでも、言

辭一つで出来て行く、其處で、仁が天下に顯はるゝ様にな
 るから、身流離顛沛すと雖も、仁義の離れぬのである……

感應と云ふ事は、未熟な者に言つて聞かするもので無い、
 餘程高尚な事で、人の教育にはさう云ふ事は言はれぬ、其
 導く先生ならば、言はれる、此の自由と云ふ世界である、
 れども、道德とか何とか言ふ話になると、云はゞ、横幅を制
 限せぬは高くなる無い、其處で、佛法でも、言はゞ、肉食妻帯
 を禁ずると云ふ、横幅を禁ずるから、以前の坊主は、一寸し

た坊主でも、其れ丈けは出来て居ると思ふから、高く見ら
 る、今日の士大夫と雖も、言はば、遊女屋にも行き、演劇も観、
 藝兒も買ふて、横に自由が利けは、高みが無くなる、其れで、
 横幅を減せぬは、高みがない、昔の大名も、二代三代の末に
 なれば、馬鹿で有つたらう、其れでも、幅を減じてあるから、
 いかにも、威儀嚴格に見ゆて、貴く見ゆる、故に、横幅を制限
 すれば、高くなると云ふ、富士山も平にすれば、何にもなら
 ぬ、横幅を利かさぬから高くなる、其處で、自由と云ふが、能
 く戒めぬはならぬ、書生を取立つる時でも、孔子等は、其
 人の長する所に依て、一方長じた人に、一方を長じさする、

何^もか^も利^かず^と平^くな^つて、何^處も^も利^かね^様に^なる^義の強い人は、義文を利かし、仁の強い人には仁丈けを導く、中々人間の體丈けの者であるから、悉く何もかも出来る、と云ふ事は出来ぬ、大工は大工、左官は左官である、是を一人で遣ると云ふ事は出来ぬ、皆上手にならぬ、それで、孔子は、其人物の性質に因て導くのである、幅が狭いに依て、高く爲る、楠の士卒に泣く者が有つて、泣くなと言へば役に立たぬ、矢張、もうすこし泣けと教ゆるが宜い、……

第三編 日本の教育

教育ノ大本ハ、宜ク、ソノ國體ノ上ニ樹立スベシ。苟モ、大本、コ、ニ在ラズシテ、漫然空論ヲ弄スルニ止マラバ、是一國ノ膏血ヲ糜シテ、却テ、不忠不孝ノ子ヲ養フ所以ニアラザルハナシ、夫レ、未、人ヲ知ラズ、安シツ天ヲ知ラン。彼世界主義ハ、先後スル所ヲ知ザルモノナリ、其ノ義ヲ謀ツテ、其ノ利ヲ計ラズ、彼歐化主義ハ、巧利ノ害ヲ煽スルモ

ノナリ。今ヤ、異端邪説、内ニ喧シク、之ニ加フルニ、
異族ノ民、外ヨリ入り來ルモノ、日ニ、愈、多カラム
トス。邦家ノ元氣、動モスレバ、銷沈サムトスルモ
ノハ、豈、其ノ緣由ナシトセムヤ。

夫子、ノ日本教育ヲ説ク、言簡ニシテ、旨該シ。八紘
ヲ包子、六合ヲ掩フ國本、蓋、此ノ一義ニ外ナラザ
ラム歟。

日本の教育といふは、他ではない、老人も小兒も、男も女も、
皆ひとしく、吾等は、先祖代々、萬世一系の天皇さまの下に

居るものであれば、この一系の天皇さまの御爲には、何時
でも、身命を擲て御奉公申し上げるといふの心を養ふこ
とである。このことが、大主腦とならなければならぬ。この
大なるものが立たざる、其餘の小なるものは、隨て立つので
ある.....

兵隊が平日は、日本帝國萬歳といつて、空に教へられて居
るのが、愈、戦争の時に成りて、遼東とか旅順とかにて喚叫
する時は、天皇陛下萬歳と言つて、帝國萬歳とは言はぬ。

ろこが、自然と、一天萬乗の君を戴きて居る所を顯はしたといふものである。理屈からいふときは、何處かの眞似をしてやり居ると言はふかなれども、天皇陛下萬歳といふ、これが餘程教育者の注意すべき所であらふ。ところで、教育といふものは、教へらるゝ人の肺腑に徹して、其の精神の煥發するやうにやらなければならぬ。面倒くさいことばかりやり居ると、繁雜になりて、却て煥發せぬものである……

日本の流儀が、近來、區々であるから、菟角種々の論が起るけれども、一天萬乗の君を戴きて居るといふが、日本の特殊なる風俗である、其の一天萬乗の君といふは、萬古不易のものである、各國にも比類なきものであるといふのが、日本流である。この流儀でやれば、何事も間違はないものである……

我が國では、皇上を奉戴するといふことが、主腦となつて居つて、如何なるものでも、之を外つれることは出來ない、

る。こ。で。外。邦。の。文。物。が。幾。ら。は。い。つ。て。來。て。も。皆。我。に。全。化。す。
 る。こ。と。が。で。き。て。日。本。流。義。に。な。つ。て。し。ま。ふ。か。ら。至。て。容。易

し……………

我。國。で。は。天。皇。陛。下。を。戴。か。ね。は。な。ら。ぬ。と。い。ふ。た。け。で。外
 の。岐。路。を。除。け。て。し。ま。は。ね。は。な。ら。ぬ。當。時。種。々。な。學。問。を。輸
 入。し。て。居。る。時。で。あ。る。か。ら。る。の。學。術。を。一。に。定。む。る。と。い。ふ
 こ。と。は。容。易。で。あ。る。ま。い。佛。教。で。も。耶。蘇。教。で。も。何。學。者。で。も、
 皆。こ。の。大。き。な。條。理。の。中。に。は。め。て。行。か。ね。は。な。ら。ぬ。昔。し。肥

前に、鍋島平五郎といふ、あらい家老があつた。頗る豪傑の
 名のある人で、その家の宗旨は、日蓮宗であつた。一日、墓參
 した所が、其の寺の和尚が、日蓮宗でなければ、極樂に往
 くことは出来ませぬ、他宗は、地獄でござると言つた。そこ
 で、平五郎曰く、愈其通りでござるか、和尚曰く、愈るの通り
 でござる、平五郎曰く、然らば、我が鍋島の君公は、禪宗であ
 るによりて、定めて、地獄へ行つて居らるゝであらう、依て、
 自分は改宗をしたい、禪宗になりたい、と斯うやつた、うち
 で、和尚は驚いて、禪宗は地獄といふに、どういふ譯で、うち
 に改宗すると仰せられる、平五郎曰く、鍋島の君公の爲め

に禪宗になつて、地獄へ行きて、閻魔王に會つて、申開きをせねばならぬ、自分ばかり極樂に行かうか、君公が地獄に往つて居られると、救ひやうがないと言つたことがある。忠義といへば、さういふやうなものである……

佐賀には、古來葉隠れ武士といふ一種の學風があつた。それは、今から、凡、二百六七十前から起つたものであらふ。この頃、佐賀藩に、石田一鼎といふ、餘程奇拔な一風違つた學者が居つた。この人が、則、葉隠れ武士の元祖である。この

石田の高弟に、山本常朝なぞといふ、一種の見識を抱いた學者があつたが、この師の訓言を傳へる爲めに、葉隠れといふ本に筆記して置いた。この後、この訓言の主意を信仰するものを、葉隠れ武士といふやうになつた。……葉隠れ武士の主義は、さういふことかといふと、一口に言はゞ、何事も唯御家の爲めと思へといふの主意であつた。この意味を書きつけたものがある。……釋迦も孔子も楠も信玄も龍造寺鍋島に被管掛けられ候義無之候へを當家の風には副ひ不申候……被管といへば管ねらるゝと書いて、昔の本には、いくらもある、奉仕すると云ふの意味たらふ。

葉隠れ武士の四誓願といふものがあつた。それは、

- 一 君に忠義可盡事
- 一 親に孝行可致事
- 一 大慈悲心を起し人の爲に可成事
- 一 武士道に於て後れ取間敷事

といふの四ヶ條で、これは、至て穩かなものであるが、又、その毎日念する信心條目といふものの中には……武士は、毎朝くもう死ぬもう死ぬ、今朝死ぬと覺悟すべし……

といふやうなる箇條もあつた……

此の葉隠れ學派の氣箴が熾な頃で、光茂公時代に、深谷信谿といふ藩士があつて、別に、又一主義を立てた。則、此の信谿は、藩主に乞ふて、楠公父子の木像を造つて、佐賀城下に、特に、二公の靈を奉祀した。その事の爲めに造つた奉加帳といふものが、近頃まで残つて居つて、その帳面の一番筆が、丹後守光茂としてある。此事は、光國卿の湊川建碑の歳よりも、丁度、三十一年前であつた。そこで、後世佐賀の尊王

論は、この深山信谿の一派が、夙に、その種子を播きたもの
のど見ゆる……………

六十

其後、深山信谿も歿せられて、楠公の木像も、何處へ往つた
か、その在りかすらも知るものが無くなつて居つたが、や
はり、藩士で、相良といふ物識りが、その木像は、梅林院とい
ふ寺にあることを知つて居た。そこで、拙者の兄、枝吉神陽
等が、その寺を尋ねて、探して見ると、果して木像があつて、
創立の時の奉加帳は、木像の胴の中に納めてあつた、これ

を發見してから、その寺で、一度か二度か、楠公の祭をした、
それから、同志者が談合して、これを祭るために、城下の城
山八幡宮といふ所に、一社を建立する計畫し、程なく、その
社も落成して、最初の祭式をした。その時には、藩の老臣を
始めとして、要路の人々も、列席された。その頃から、世間が、
段々、外患のことにつきて、感しはじめたが、この楠公社祭
式の事は、ペルリの來航以前である……………初めての祭の時、
拙者は平凡な和歌を詠したことがある。

今もなほ天つ日つぎの御代ぞかし

守らせたまへ楠の神

六十一

寛文二年、深江平兵衛入道信銘、佐賀北原村ニ隱居セシ時、楠公父子ノ神靈ヲ崇祀シテ、旨、藩主乗輪院ニ乞ヒ、其ノ合力ニヨリテ、父子ノ木像ヲ造立シテ、己ガ菴室ニ奉祠シ、菴ヲ、藩主ノ菩提所高傳寺ノ末班ニ屬セシメ、文明寺トイフ、此事、光國卿、湊川建碑ノ歳ニ先ツコト、實ニ三十一年前ニ在リ、後、菴室破壊セシヲ以テ、其ノ木像ヲ、佐賀郡本莊村梅林菴ニ移ス、菴亦、高傳寺末ナリ、嘉永三年五月二十五日、枝吉神陽先生、信銘ノ後胤深江平兵衛種祿並ニ有志ノ士ト共ニ、梅林菴楠公父子ノ影前ニ於テ、中絶ノ祭典ヲ再興セラル、後、安政三年、藩主ニ請ヒテ、佐賀白山八幡宮ノ側ニ遷坐奉祀ス、此事、深江種祿ノ出願ニカ、ルト雖、幹旋規畫、悉、神陽先生ノ力ニ依ルトイフ、

公平々々といふけれども、その公平を教育にまで持ち込

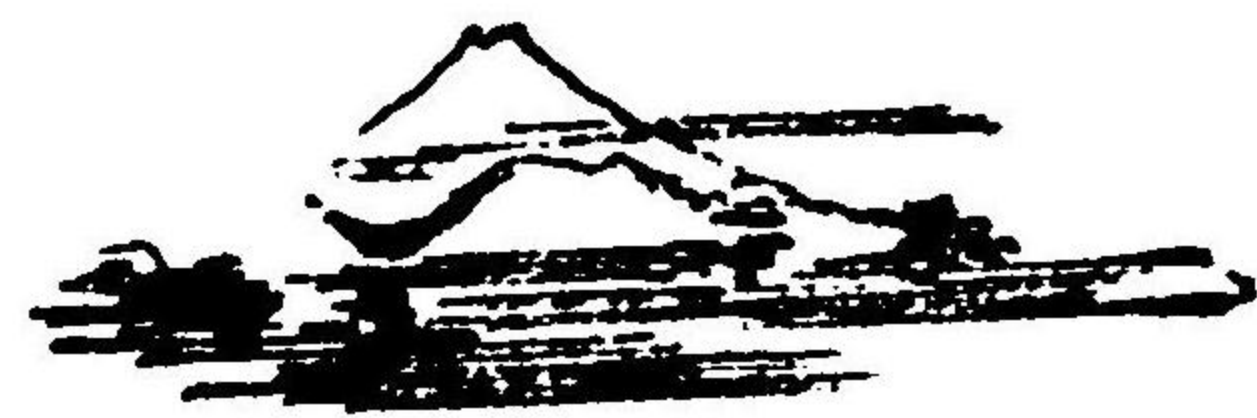
んで、あまり公平な教育ばかりすると、國は衰へる、寧ろ、それよりは、優勝となるも、劣敗となる勿れといふ意地がなく、てはならぬ、凡て、人には、少々意地といふことが必要であらふ、意地といふては、語に、少々病はあれども、これが無くては、人でも國でも、立つことは出来ぬ、天もこゝに至りては、止むを得ざることを、思ふでござるであらう、無暗に、公平の博愛のとはかり言ひ居ると、國は亡びてしまふ、未知人焉、知天といふも、こゝのことた、未だ人道の盡すべきことを知らずして、漫に、天意がどうとかかろうとかなきといふは、却て天意であるまい、.....

不。得。已。と。い。ふ。こ。と。は。ど。う。し。て。も。あ。る。も。の。た。不。得。已。と。い。ふ。こ。と。の。證。據。は。荒。魂。で。あ。る。人。が。己。に。荒。魂。則。勇。の。魂。を。享。け。得。て。居。る。以。上。は。我。に。敵。す。る。も。の。に。打。勝。た。な。け。れ。ば。な。ら。ぬ。そ。れ。で。な。け。れ。ば。生。存。す。る。こ。と。が。出。來。な。い。豫。て。い。ふ。通。り。人。は。四。面。皆。敵。の。中。に。居。る。も。の。で。あ。る。か。ら。不。得。已。の。場。合。に。は。勇。の。作。用。を。表。す。と。い。ふ。は。無。據。さ。こ。と。で。あ。ら。う。

人。に。躰。が。あ。れ。ば。蚊。で。も。蚤。で。も。よ。つ。て。た。か。つ。て。人。を。喰。ふ

と。言。つ。た。や。う。に。四。面。皆。敵。な。ら。さ。る。は。な。し。た。此。間。に。居。て。唯。仁。と。か。何。と。か。言。う。て。居。つ。た。處。で。仕。方。も。あ。る。ま。い。り。れ。故。大。に。勇。を。養。て。天。下。萬。物。皆。我。が。脚。下。に。在。ら。し。む。る。と。で。も。い。ふ。や。う。に。大。勇。を。養。ふ。て。こ。の。大。勇。に。よ。り。て。大。仁。を。施。さ。ね。ば。な。ら。ぬ。唯。々。仁。は。か。り。を。思。て。居。て。は。大。仁。を。施。す。こ。と。は。到。底。出。來。ぬ。も。の。で。あ。る。養。ふ。べ。き。は。大。勇。で。あ。る。而。後。に。大。仁。を。天。下。に。施。し。得。る。の。で。あ。る。.....

初對芙蓉峰 薄對芙蓉峰
峰色無朝暮 雲爲八奈容



第四編 日本ノ歴史

我が國體ノ尊嚴ナルヲ言フ者少シトセズ。然レ
トモ、其ノ尊嚴ナル所以ノ淵源ヲ究メテ、眞實ニ、
我が歴史ハ、坤輿唯一ノ神典タルコトヲ諒スル
モノニ至テハ、寥々晨星ヲ觀ルガ如シ。況ヤ、輓近
刊行ノ書、我が上代ヲ一括シテ、鴻荒知ルベカラ
ズト爲スモノ、蒙昧蠢愚、猛獸毒蛇ト伍ヲ爲シ、
ニ過ギズト爲スモノ、比々、皆是ナリ。如此ニシテ、

敢テ祖先ニ敬ナラズ、又、後昆ヲ過ラザラムトス
ルモ、豈、得ベケムヤ。

夫子ノ言ニ曰ク、我ガ神聖ナル歴史ハ、皇道ノ經
典ナリト、其ノ旨、高遠、其ノ説、宏大、眞ニ是神州元
氣ノ本幹ナルモノ歟。

我が國の上代は、野蠻であつたなどいふけれども、野蠻
では出来ないことが幾つもある例へば、初めて、言語など
作り出したは、野蠻では出来ないて、拙者嘗て、人に談した
ことがある、今仮りに、西郷南州とか、ビスマルクとかいふ

世界。の。豪傑。といはるゝやうな人々を、一つの無人島に集
めて住はせた。とするときは、島の野蠻島と言ふで
あらふか、勿論、島の種々な機械も、電信も、汽車も、無
からふけれども、これを野蠻世界とは言へまい。元來野蠻
といふことは、不足といふことゝは、全く意味が違がふ……

日本紀も、古事紀も、皇室の歴史である。神武天皇の御先祖
は、天に出たのであるといふ歴史である。そこで、神武天
皇の靈時を鳥見山に立て、皇祖天神を祀り、以て大孝を

申ふとしてあるは、則孝の場である、うこそ、天皇様は、孝あつて忠なしと言はんが如きものである。臣民は、忠を重むに説きて孝に持ち込めは、孝の中で、一番の孝は、君に忠を盡くすことである、人臣は斯う説く、うこそ、社會の安寧を保つのみならず、常に君を君として行けは、國家の發達は出来るものである.....

皇道と儒教とは、其思想の相近い處もあるけれども、うの大本が大に異つて居る。則、我が皇道は、天御中主神を御先

祖として、萬世一系の皇室を戴くといふの主義なれども、儒教は、易姓革命と言ふて、自づと、人民を主としたものであるから、うの根源に於て、君主主義と民主主義との相違がある、うこから、末が、たんと異て居るのである.....

次ノ一編ハ、先生嘗、日本歴史ハ道德ノ經典ナリ、トイフノ旨

ヲ講話セラレタルモノニテ、一タビ、國光誌上ニ登載シタルモノナレ

ドモ、其意義甚高大ナルモノアリ、依テコレニ載録ス、

我が日本國は、建國の体相、自然に出で、神聖なる固有の道義存せりと稱す。然れども、我が國、嘗て、其の至高なる道義

を詳説せる書契あることなし。古今の學者、其の唱道する所、幾百萬言、概皆、孔孟を祖述し、堯舜を崇敬するものにして、特に、我が固有の徳教を明にするものあることを聞かず。何によりて、其の所謂神聖卓絶なる美德良風を晰むることを得んや。人或は、日本の歴史は、則此の徳教を明示せるものにして、仔細に之を察すれば、以て、我が道德の本体を明らむるに足るものありと云と雖も、未だ、徳教の意義、整然として、其の間に明晰なるものあるを見ず。世界各国の史を讀むと、甚た大差あるなし。彼の支那の經典、或は、西洋の聖書の如き、各其の綱領を詳説して、義理明哲、大小餘

さず、人をして、容易く其の旨とする所を詳にし、其の眞味の、高大正明なるに感せしむ。我が國、已に固有の道德を存せりと稱す。而して、經典聖書の、明晰に容易に、其の主旨を教ふるが如きものなき、是れ掩ふべからざる欠點なりと。這の般の謬想を懐ける者、世、甚少しとせず。自ら惑ひて、而して人を過る、其の弊の及ぶ所、甚、大なるものあり。辨せざるべけんや。

抑、物、本ありて末あり、源ありて流あり。國家の成立、皆其の元始を有せざるなし。而して、各國歴史の本源を原ぬれば、其の体相、概、相同しきを見る。英史は何より出てしか、佛

史は何人に始まりしか、魯國は如何、日耳曼は如何、等しく是れ、夷族蠻民の占領、酋長の奪略を元祖とするに過ぎず。彼の、アダム、イブが初めて、タイグリス河畔に生出せしと云ふが如きも、單に人類生出の始を云へるに外ならず。而して、世々代々、戰鬪奪略を事とし、干戈によりて、辛うして、其の版圖を維持し、德教湮晦、民心淳朴ならず、萬般の事、感情の融和を去り、只、威力と法律との力に依りて、漸く平安を保てる事跡なり、此等の歴史を通觀せる、眼孔を以て、直に我が國の歴史を閱し去らば、歴史は德教を示さずとする、固より宜なりといへども、抑我が國の歴史は、時運の變遷

社會の狀態を記せるに止まるが如き、單純無味なるものにあらずして、世界の元始と共に存在せる、德教の眞理を闡明し、自然の道義を説示せる、經典なり、我が國の成立は、決して、彼れ蠻族の占領、酋長の奪略に基せるが如きものにあらず、嚴乎たる、体相、自然に出づ、歴史の傳ふる所に曰く、天地未、剖判せざるの時、渾沌たること、鷄子の如く、溟滓にして、牙を含めり、其の清陽なるもの、薄靡して、天となり、重濁なるもの、淹滯して、地となる。于時、天地の中、一物生れたり、便ち化して、神となると、是れ、深奥幽微なる世界の元始を闡明して、最精確なるものなり、天地陰陽、未だ剖れさ

るや、宇宙清濁渾沌、溟滓の一体なりしなり。清妙の氣乃ち、抽出して、重濁なるものと相分凝す。神は、輒ち、其の精靈の氣、自ら磅礴せるものなり。神ありて、而して後、天地を造出せしものにあらず。天御中主神は、實に天地元始の主宰にして、人類の始祖なり。自余の神靈、相亞きて現出し、諸冊の二尊に至りて、大に萬象を化生し給ひ、天孫の初めて、此の土に降臨し給ふや、天祖の至靈なる神勅によりて、天壤無窮の皇基を定めさせ給ひ、神孫一系、神武天皇に至りて、不臣を芟除し、皇土を掃蕩し、以て、天祖の皇猷を恢弘し給へり。即位の四年、天皇、靈時を鳥見山に立て、大業を天祖に

申告し給へり。其の詔に、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬、今諸虜已平、海内無事、可以郊祀天神、用申大孝者也。と、夫れこの孝とは、即ち、天御中主神より、先皇、鵜菅葺不合尊に至る迄、歴代の天祖に對し、其の業を立て、徳を布き給へる功績を以て、天神の先志に協はん事を期し給ふに外ならず。爾來、世々の列聖、民庶を撫育し給ふ盛旨、常に皇祖の遺徳を承繼し、皇宗至仁の主旨を明にし給ふに在り。

今上陛下、英聖文武、大に綱紀を振張し、國威を世界に照耀せん事を勉め給ふ。維新已來、諸の詔勅、常に皇祖皇宗の宏猷によりて云々と宣ふもの見るべし。我が皇徳の大綱、

萬世一旨、只祖宗の宏猷を崇敬し給ふに在ることを、夫れ、孝は道の大本にして、萬善の由りて生ずる所なり。上至尊より下庶民に至る迄、一旨貫通、其義二ならず。上下共に俱に其の親を愛し、祖先を敬するもの、是れ、我が道義の大本なり。彼の滔々たる江河の水、千頃の波浪を激するも、其の源泉に遡れば、達する所、唯一道の細流に歸するが如く、我が日本人民、萬姓の祖、之を窮むれば、即ち天神に出づ。忠孝二致なし。親に孝なるは、君に忠なる所以なり。君に忠なるは、天神天祖を敬する所以なり。苟も天祖の靈旨に悖らざらんことを努むるものにして、豈不忠の臣あらんや。萬世一

貫、其の祖先を敬するもの、則徳義の本源なり。故に、我が國の歴史を講ずる者、先づ天地開闢の始に遡り、國家成立の靈妙なる淵源を窺ひ、以て、列聖の遺範を拜するを得ば、則ち、我が道義の由來する所、高遠にして、幾萬年來、事實に現在せる所の徳行、了然たるを見るべし。故に、我が固有の徳教は、上下一貫、本旨、唯孝の一義に歸す。忠愛信義、皆孝の一端に外ならず。苟も、此の理義明晰なることを得ば、燦然たる徳教、自ら行はるゝを得べし。宇内萬國、各歴史を有せざるなし。雖も、王室の事蹟は、概、鬪争、篡奪を以て充たされ、専ら社會人情、風俗の變遷、盛衰興亡の事蹟を序列せるも、

のなり。此等の歴史を閲せし眼を以て、我が歴史を通觀し、直に歴史に道義なし、徳教の本旨なしとするは、思はざるの甚しきものなり。苟も國家成立の特相を察し、我が歴史は、眞理一貫、萬世に亘れる明教の常に包有せるものなることを知得するあらば、其本領を得る、決して難からざるべきなり。

若夫れ、一家に於けるも、數代の主、其の德行郷黨の欽慕する所たり、其の美風閭里を化するに足るものあらば、是れ、その家族の榮譽にして、子孫其の風を守り、其の徳を承け、以て、其の先人の遺徳を汚さざらむとする念、必、深厚なる

べきなり。苟も父祖の行跡、正道に反し、或は大盜たり、或は逆賊たるが如きあらば、一族何に鑑みて、人倫を全うすることを得んや、其の家系の存するものあるも、却て、其のなきの勝れるに若かさるべし。一人の家、己に然り、況、國家の歴史にして、大惡暴戾を記せるもの、豈風教の源となすに足るべけんや、於是か、別に徳教を説ける書、存在せざるべからず、理義を講ずるの學、起らざるべからず。是れ、支那或は西洋諸國に於て、聖書經典の存在する所以なり。苟も、其の義を道理に求めて、之れを實際に適用せんとせば、人によりて、其の説く所を異にし、千派萬流、究極する所なし。是

れ、宗教論の多岐なる所以なり、其の言を美にして其の實を得ざるもの、是れ他邦の道德に非ずや、我が高大正明の道義は、天地開闢の始より、幾千萬年來、常に事實に存在して、之れが明鏡となり、之れが模範となりて、常に史上に煌耀せり、何を苦みてか、特に經を編じ、典を作りて、其の義を述ぶることをせんや、經典の要之を實にするにあり、苟も、其の言を美にするに止まらば、萬卷の書も、用ゐる所なし、我に徳教の書存せざるもの、是れ、我が道義の至高至美、自然に出る所以なり、依之觀之、我が神聖にして、宇内無比なる古事記、日本書記以下の歴史は、天地開闢の初に源せり、

道義の經典なり、忠孝の明鑑なり、人倫の大綱を、事實に明示して萬世に垂るゝ天祖の遺範なり。

世の、日本歴史を云ふ者、神武天皇御即位以後を專にして、神代は、之を荒唐不稽とし、全く、歴史の本部に加へざらんとするが如きもの、少しとせず、謬見の甚しきものと云ふべし、苟も、開闢の元始より、此の國家の神聖なる所以を明にするにあらずんば、是れ、本を棄てゝ、末を論ずるものなり、其の一を知て、未、其の二を知らざるものなり、異端邪説、隨て起る、元氣の消長、亦、爰に基せずんば、あらず、軍事、法律、教育より、國家萬般の經營、皆、此の特相に考へ、神聖なる遺範

に忤はざらんことを要す。否らずんば、摸倣疑似、邦家の本
軀に合せず、國運の昌盛、萬歳究なからむる所以にあらざ
るなり。……………

第五編 無有

天壤無窮、報本反始、至誠感通、忠孝仁義、此等皇道
ノ神髓、國軀ノ精華タルモノ、淵源ハ、抑、何レノ
處ニカアル、他ナシ、神州ノ民、皆、祖先在天ノ靈、千
秋萬古、嚴トシテ、照臨マシマセルコトヲ確信シ、
事死猶事生ノ念々ヨリ煥發スルニアラザルハ
ナシ、乃知人雖亡、英靈未曾泯、長在天地間、隱然叙
彝倫トイフモノ、正ニ、是櫻花國魂ノ基スル所、日

本教育ノ要義、豈又他アラシヤ。

夫子、倫理扶植ノ至誠、一代ノ人心ヲ感奮興起セ

シムルモノ、正ニ、コノ篇ニ於テ、之ヲ觀ル。

無神論といふことを、理屈から言へば、随分、色々といふからふけれども、情愛から論して言ふと、無神論といへば、君父が死なれるれば、其靈も亦消へて無くなつてしまふといふことにならる。しかし、消へてしまふといふことは、あまり惨刻な談である、果して然らば、惻隱の心、何くにあるか、萬々、君父の靈が消へてしまふにせよ、尙在りはせぬか

と思ふが、是れが、臣子たるもの、君父を思ふ誠である。太神宮の靈も在しますなり、神武天皇の靈も在しますなり、と云う思ふから、萬古に亘りて、忠義の心も感奮するといふものである。君父を尊ぶと言つて、君父が死なれるれば、其靈も直に消へてしまふといふならば、其尊ぶといふのは、暫時の間である、そして、臣子たるものの誠は、安くにあるか、

夫子ノ詩旨、奥妙深邃、容易ニ窺ヒ知ルベカラズ、清人何如璋、嘗、我朝ニ公使タリシ日、評シテ曰ク、副島先生

ノ詩ハ、一讀再讀、未、遽ニ其ノ意ヲ得ベカラズ。讀ムコト三日ニ至レバ、是ヨリ、漸、趣味津々、遂ニ究極スル所ナキヲ覺ユト。又、其任滿テ歸ル日、佐野伯邸ニ於ケル送別會上、如璋、留別ノ辭ヲ陳ベテ曰ク、余、今、茲ニ、一言ヲ日本諸公ニ留メント欲スルモノアリ。他ナシ、副島先生ノ文辭ノ高遠ナルコトハ、之ヲ窺ヘバ、愈、深ク、之ヲ仰ゲバ、愈、高シ。遂ニ、其ノ奧ヲ端倪スベカラズト。夫子ノ學殖、高大深遠、固ヨリ、他ノ稱賛ヲ俟テ知ルニ非ズト。雖モ、彼漢文ノ本土ニ生レタル人ニシテ、尙、此ノ言アリ。後進ノ士、豈、窺ヒ易カラシヤ。次ニ載スル所ノ二

首ノ如キ、僅々百余字中、夫子獨得ノ大見ヲ、隱約ノ間ニ叙説シテ、最含蓄ノ微ヲ極ム。讀者、諷誦玩味シテ、百回千回怠ルナクシバ、又以テソノ一斑ヲ窺フニ足ラムカ。

詩一首

無々不生有。有々安得無。自古立言者。若有所負逋。
 今欲説無者。爲抱身後虞。今欲説有者。爲有現在軀。
 試念彼大鈞。所挈何鴻鱣。何鑄復何冶。何吹復何嘘。
 何物其所用。何物其所須。所須自有物。豈非壹氣歟。
 壹氣所旋轉。既生復有餘。萬有屬々充。群類蕤々蘇。

壹氣所靈動。 既實復不虛。 精神潑々活。 言語嚙々嚙。
 大究立運妙。 中爲國家圖。 小爲一身謀。 厥德遂不孤。
 莊周不知道。 徒爲是遽々。 孔子不知仁。 性道聞不呼。
 吾欲呼父母。 豈不在天乎。 壹氣不死滅。 生理不榮枯。
 氣物不増減。 歸源不爲殊。 昔有而今有。 將來尙其符。
 釋氏說輪廻。 其言又區々。 吾則異於是。 倫理欲見扶。
 有々果生有。 無々終歸無。 至理難滅盡。 光耀於天衢。

これは、詩か題が無いに依つて、唯々理屈らしい事を、聊考ふる筋があつて、詩が出来たところで、詩一首と題號を加へた。

無々不生有。 有々安得無。

此の一句の趣意は、拙者が考へる種になる所は、日本の歴史、支那の歴史、それから各國の傳へ杯もあるが、其中にも、我國では、輕清なるものは天と爲り、重濁なるものは地と爲るとあつて、有るものが變化したと云ふ様に、見えて居る、無いものが新たに出来たと云ふことはない。古事記の天津神の章にも、天地初發之時、於高天原成神名天之御中主神とある、是れは、どうして出来られた、どうして有つたと云ふ事はないが、其次に、國權如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流之時、如葦牙因萌騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備

比古遲神とある。支那の書には、易に、太極あり是れ兩儀を生ず、としてある。有るものが生ず、としてある。うことで、假令その様な神明力あるものをも、無いものを造つたといふことは有る間敷きかと思ふ。有るものを以て、變化するといふことは、止むを得ざるの神業でもあらう、なせかといふと、天地間に成立つて居るものは、矢張り、善いものもある、即ち人間の様な靈妙なものもあるが、又拙いものもある、是れは、有るものに依りて造るから、その中の糟粕は、拙いものになるのであらうと思はる。兎も角も、其の拙いものを造るは、神の主意でないけれども、有るものを以

て變化さするから、勢、其の餘滓糟粕を以て、拙いものを造らざるを得ぬのである、されど、其の拙いものは、未だ氣の鍊れざる糟粕なれば、其の糟粕を、次第に鍊熟させて、遂に純粹に至らしむるは、神の進化力にて、今日も、神は物を進化さすると同時に自身までも進化しつゝあるは、疑ふべからざること、のやうに思はれる。是は、歴史に依りての想像である。其處で、拙者、早くよりの考案は、決して無が有を生ずると云ふ事は無いと思つて居る、さうすると、有るものが消滅すると云ふ事はどうしても無い筈、變化はするであらう、無いものに、有るものになると云ふ事は、どんな

物にもないと思ふ造物者は、即ち、有る物を變化はさず
 けれども、無き物を作り立つると云ふ事はないと思ふ。有
 る物が變化して居る所から言へば、それは、例へば、人間の
 目で消滅した様に見えても、それは、變化して居るばかり
 であつて、無くなると思ふことは、ない。善じや、有々安得無
 と云ふは、上の語を押へて言ふ語である。押へるのみなら
 ず、消滅する事は無いと云ふ主意である。

今日モ、神ハ、物ヲ錬熟シツ、アリ、物ハ、サレツツアリ、而シテ、神ハ、工夫
 鍛錬、生々化々、一日一日進化シツ、アリ、物ハ、サレツツ、アリ、物々進化
 神ノ化工ヲ全ケル時ハ、即、所謂黄金時代トナラシメ、然シテ、物性ハ、無
 盡、神力無窮ナレバ、永々久々、生ズル者ハ、化シ、物ト神ト、遂ニ無窮ニ歸

セン

自古立言者、若有所負遺

古の立言者の言つて居る所は、茫漠として、どこやら、負債
 の有る様に、して、語が償ふて居ない様に見えて居る。

今欲説無者、爲抱身後虞

是は、今、消滅すると思つて居らうと思つても、自分の身が、
 後に消れたとなつては、いたましいと思ふばかりから、無
 は説さにくいと斯く思はるよ、

今欲説有者、爲有現在軀

其處で、今、あると斯う言はふとする者は、又、現に、我が身の

有るのではないか、有る物が消滅することはあるまいと思ふからの事である、其處で、今の想像は一寸措いて、試みに念つて見るが宜からう。

試念彼大鈞。所挈何鴻鑪。何鑄復何冶。

何吹復何嘘。

鴻鑪と云ふと、大なる「タ、ラ」である如何なる「タ、ラ」を以て、造物者なるものが、仕掛をするか、如何なる「タ、ラ」に掛けて造るか、是は、語を折返へして言つたことである。

〔大鈞〕字典、大鈞、天地、漢書、大鈞播物、坎北無隄、註曰、兩者作器鈞上、此以造物爲大鈞、言造化爲人、亦猶陶之造瓦耳。

〔鴻鑪〕字典曰、火鑪也、賈誼曰、天地爲鑪、造化爲工、陰陽爲炭、萬物爲銅云々。

何物其所用。何物其所須。所須自有物。

豈非壹氣歟。

是の、壹氣の、一の氣と云つても宜いが、精一の氣を云ふ。此の壹の字を書くときは、天地間、自ら精一なるものがあつて、其の精一の氣が、

〔一〕前漢書郊祀志曰、秦一者天地未分元氣。

〔氣〕文子曰、氣者生之元也。

壹氣所旋轉。既生復有餘。

旋つて居る所が、即ち既に生して復餘りありで、物を生みて、幾らも餘りがある、其處で、數千年も、万年も生々して行

く所である。

壹氣僅ニ旋轉スレバ則チ物ヲ生ズ、而シテ、旋轉止マズ、此ヲ以テ、化工無窮、品物無盡、既ニ生シテ復有餘。

萬有屬々充⁺ 群類蕤々蘇。

萬有屬々として、續き涉つて、滿ち充ちて居るも、群類蕤々として蘇へつて居るも、是は壹氣の作用である、

〔屬々〕相連屬之形、

〔蕤々〕説文、蕤、草木華垂貌、

壹氣所靈動^{スレ} 既實復不^{ナラ}慮。

其處で、群類蕤々蘇々では、拙者の意では、重もに体に屬す

る氣、壹氣所靈動からは、精神の部分になる。

精神潑々活 言語啞々嚙

其處で、体の氣になる部分と、精神になる部分とがあつて、二つ共、是れは、無ではないと云ふ意である。其處で、拙者の説では、体の氣になるものは、固より、精神と雖も、必ず有と云ふものである。唯々世人は、目に見ゆるに依りて、無いと思ふは間違で、必ず有るもので、作用するものがあると思ふ、

元氣、即壹氣ノ中ニ、体ニナル部分ト、精神ニナル部分トアリテ、体ニナルモノハ、蕤々屬々生シテ有餘、精神ニナルモノハ、潑々啞々、實ニシテ

不虛皆本來空無ノ物ニ非ズ。

大究立運妙 中爲國家圖

其の精神の作用と言ふものを概約してみれば、即ち大究立運妙で造化とは、どんなものであるかと、精神が考へ出す。中爲國家圖中に至つては、即ち國家と云ふものを立てよ、さうして人民の爲めに保護せねばならぬと、人類相憫むと云ふ、國家の爲めに圖るといふことを、又やつて居る、

小爲一身謀 厥德遂不孤

さてまた、一身の生活と云ふものを、精神の場から言へば、即ち天下を平かにせんと欲するものは、先づ其身を修む

と云ふやうに、一身を修めて、さうして天下でも引立てねさならぬと云ふものであるから、矢張り、一身の謀をする。と云ふときは、身を修むると云ふ精神の作用が、一番肝要と思ふ、さうすると、厥德遂不孤で、精神の感ずる所、同氣相求む、御尤もである。と云ふもので、一人ならずして、朋友も出來、社會も出來、國家も成立つて、さうして、後世までも、昔し、何某が斯うであつたと言つて、其の徳を賞美する様に、なれば、其徳と云ふものは、孤ならずして、續き渡つて、伴れがある。と云ふものである。畢竟、天地間の徳と云ふものは、先づ一つであつて、同種類と見なければならぬ。其中に、惡

を。す。る。も。の。が。あ。れ。ど。も。う。れ。は。其。の。未。だ。純。熟。せ。ざ。る。も。の。
 であつて、本来、悪といふものではない、うれは、猶、果物の苦
 澁なるは、其の成熟せざるに原つくがやうなもので、成熟
 さへすれば、美甘になるものにて、人もろの如く、次第に純
 熟するに從て、美質となる、本来は、悉く同一種類で、善悪二
 様ある者ではない、例へば、悪といふことは、誰でもきらふ、
 泥棒でも、汝は悪人であるといふと、怒る、善人であるといふ
 へば、喜ぶ、さうすれば、其の喜ぶ所から云へば、善といふ事
 を喜ぶならば、人の性は、善と云ふことの掟が分る筈であ
 る、其處で、何も彼も、ちやんと定つた筋があるのに、

尙書曰、惟尹躬暨湯、咸有一德、克享天心、受天命云々。

伯夷ノ風ヲ聞クモノハ、頑夫モ廉、懦夫モ有立志、柳下惠ノ風ヲ聞クモ

ノハ、鄙夫モ寛、沸夫モ敦、千萬歳ノ後ト雖モ、厥惠終不孤、況當時ヲヤ、

莊周不知道、徒爲是遽々

莊周は、世の中を嘲りて棄て、過でされた、此の莊周も、乱
 世に居るから、止むを得ずして、世の中を嘲りて、立言を奇
 怪に立てた様である、

昔者莊周、夢爲胡蝶、栩栩然、胡蝶也、自喻適志、與不知周也、俄然覺、則
 遽々然、周也、不知周之夢爲胡蝶歟、胡蝶之夢爲周歟、周與胡蝶、則必
 有分矣、此之謂物化、

孔子不知仁、性道聞不呼

孔子は、聖人と云ふに依りて、固より、仁を知つて居る人であらふけれども、性と天道とは得て聞くべからずと云つて、娑婆世界の事はかりを言つて、性と天道とは缺畧された人の尋ねる時は、答へても宜さうなものであるから、孔子不知仁と、一寸嘲つて見た、

吾欲呼父母、豈不在天乎。

父母の生きて居らるゝ人は、此世に父母があるであらうが、拙者等は、父母が早く死んで居る、父母を呼ぶとすると時は、必ず天に居らるゝのであらうと思ふ、これが天の罔極を悲むと云ふことで、天を仰ぎて、父母を呼ぶならば、父母

が聞いて下さらぬことではないと云ふの意である、

〔罔極〕受天罔極見
詩經豳莪

壹氣不死滅、生理不榮枯。
天地間の氣は、死んだり生きたりするものでない、氣と云ふものは、死なない筈のもの、死なないならば、生理不榮枯榮たり枯れたりすることはない、いつも生きくじして居るものである、

列子曰、有生者、有生者云々、生之所生者死矣、而生生者、未嘗終云々、生
生者即渾淪元氣、即壹氣也。

又曰、生者不能不生、化者不能不化、故常生常化、常生常化者、無時不生無
時不化、常生則生理不榮枯之謂也。

氣物不増減。歸源不爲殊。

万物天に出づるとすれば、其の源は殊なりとせぬ、一のものである。歸する所の根源は同一にして、萬物盡天を本とす。故に殊塗一致である。然らば、近來人種論など、云ふことは、歸源を殊にし、た説である。殊の外善くないことである。

昔有而今有。將來尙其符。

其處で、昔かやうな壹氣と云ふものがあつたから、今も有るのである。今有るに依つて昔も有つた事が分かる。將來尙其符、將來と雖も、此の壹氣は符合して必ず有るもので

ある、

壹氣ハ本來不増不減ナリ、故ニ化生無究ナリ、若シ壹氣ニ増減アリトスレバ、生々化々無究ノ働ヲナス能ハズシテ、物亦減滅ニ歸スルノ時アラン、

董仲舒曰、道之大源出于天、天群物之祖也。仲舒傳

天統元氣中文子中

殷湯問於夏革曰、古初有物乎、夏革曰、古初無物、今惡得物、昔後之人將將謂今有之無物可乎、

釋氏說輪廻。其言又區々。

人間が牛に生れ代るの馬に生れ代るのといふが、輪廻である。釋氏が輪廻を説くが、その説は、狭い區々なるもので

百八
ある。畢竟輪廻説は精神の歸着する所が無い様に見ゆる。人間が犬になつて、犬の精神が人になると云ふやうなることは、仁の徳に戻る様である。

仁ハ、即天地生物之徳也。天地已ニ生ヲ好ム、今、人ニシテ忽焉化シテ牛馬トナリ、介蟲トナリ、泥犁ニ沈ミ、阿鼻ニ墮ツ、是釋氏輪廻ノ説ナリ、若シ夫レ如此、則チ天地生物ヲ愛スルノ徳、其レ果シテ何處ニアルカ、區々ノ小見、固ヨリ論スルニ足ラザルナリ。

吾則異於是。倫理欲見扶。

我の此等の説に異ると云ふものは、天地の倫理を扶ける爲めの説である。其處で、精神の消々ぬと云ふならば、先祖

は何時でもちやんと見てござる。朝廷の祖宗の方々も、神武天皇もちやんとござる。然らば、天地もちやんとして居る。遺傳と云ふものが、燦然としてあるものであるから、天を欺くことの出来ぬと云ふ筋合である。拙者此の世の倫理を扶けんと思つて、此の道理を詩に述べたのである。其倫理を扶けんと思ふは邪説であるかと云ふに、

祖先在天之靈、儼然昭臨、可豈不爲肅然哉、是レ實ニ忠臣孝子ノ心ナリ、此ノ一首、倫理扶植ノ効、高且大ナリトイフベシ、

有々果生有。無々終歸無。

有は有を生ずると云ふ結着した理があるならば、無さむ

百十
の。は。終。に。無。に。歸。す。無。き。も。の。は。何。時。で。も。無。い。有。る。も。の。は。
何。時。で。も。有。る。と。云。ふ。な。ら。ば。こ。ゝに。倫。理。を。扶。け。ん。と。思。ふ。
は。一。人。の。私。説。で。は。な。く。し。て。即。ち。其。れ。が。天。地。に。燦。然。た。る。
も。の。で。は。な。い。か。

至理難滅盡。光耀於天衢。

至。理。と。い。ふ。も。の。は。さ。う。消。れ。滅。る。も。の。で。な。い。種。々。の。邪。説。
の。爲。め。に。世。間。の。人。が。惑。ひ。て。も。其。の。道。理。と。云。ふ。も。の。は。天。
の。衢。に。光。耀。さ。て。居。る。と。云。ふ。の。生。意。は。あ。る。……………

第六編 觀道

人、至靈ノ心ヲ以テ、至靈ノ宇宙ニ住シ、至靈ノ大
道ニ行動シテ、其ノ至靈ナル所以ヲ覺ラズ。却テ
道ヲ理義ノ狹隘ニ求メントシテ、今古東西ノ諸
説ニ出入シ、畢生拮据齷齪シテ、遂ニ至靈ノ大道
ヲ悟リ得ザルモノ、比々皆是ナリ。道固ヨリ東西
古今ノ別ナシト雖モ、古今東西、人ニ依テ、其ノ所
説、各異ナリ。畢竟、彼ノ漢土、梵天、及西洋ニ發生セ

ル諸多ノ哲學ハ、其ノ世ニ出デタル起端ニ於テ、
已ニ我ガ隨神ノ道ト相距ルコト遠キモノアリ。
道ヲ求ムル士、宜ク深ク慎重シテ、事ニ從ハザル
ベカラザルナリ。

夫子ノ大道ヲ指示スル、易簡明覈、蓋、皇朝固有ノ
光明ニシテ、夫子ヲ待ツテ、始メテ發顯スルモノ
カ、讀者之ニ依ツテ、研鑽怠ルナクムバ、源泉渾渾、
沛然千里、江河ヲ決シテ、之ヲ能ク禦グベカラザ
ルモノアラム。

道を修むるの、道を講ずるのといふて、今迄、かつて無かつ
たものを、今新に發見するといふやうな考で居つては、甚
間違が生し易い、道とは、天地開闢以來、何時も一貫して存
して居るものである、開闢の時の忠孝も、今日の忠孝も變
りはない、今日の忠孝は、後世の忠孝である、無きものが、新
に發見されるのではない、菟角、道を明むるといふことを、
蓄音器でも發明するやうに考へるのは、甚しき間違であ
る、蓄音器でも、其發すべき自然の音が、宇宙の間に存して
居るから、それを、人工で發音させるのであらふ、人工で新
に音を作り出すとは言はれない……

古來、道を求めた人々の所爲が怪しいといふのは、釋迦は雪山の中を行をもたといひ、耶蘇は何處の山に籠つたといひ、「マホメット」は「コーラン」といふ書物を作る時に、山の洞穴で行をしたといふが、山の中でなげれば、行の出來ぬといふは、それからが疑問である。世に彼是の論もあるけれど、孔子は青、天、白、日、堂の真中で、道を講究された。則父母妻子團樂の中にて、道を講説された。

倣古

觀道如觀水。 觀沼水流瀾。 之河之江海。 洪波又淼漫。
 曷知津涎液。 孰爲非水湍。 觀道奚異焉。 源歸若爲殫。
 觀道一身中。 忠孝豈異端。 觀道一心裏。 定懷忠勇肝。
 言其室家狀。 八口團樂歡。 推之天下事。 孤兒弗可謾。
 曰天而曰帝。 昭明不可于。 曰帝而曰父。 父子仁愛看。
 天地攸窮極。 此理匪寡單。 延及無邊外。 推論此不難。
 庸人還說道。 道尊四民瘡。 焉知夫婦愚。 與道可參觀。
 孔丘近取喻。 喻近人永歎。 道無有小大。 水無有狹寬。
 以盆設爲沼。 島山盡峴嶺。 有魚環遊之。 浮泳至歲闌。

今、この詩に就ていふと、大凡道といふものは、大小もなく表裏もなしと斯ういふのである、そこで、大なるが道かといふと、天地充塞で、小なるが却て道であるかも知れぬ、天地に充滿して居るものであるから、髪の毛一本疵がつかなくてもならぬものである、大なるばかりを見て、大道といふけれども、小さいところが大道かも知れぬ、道に表裏なし、表がよくても、裏が粗漏ではいかぬ、裏ても表でも、八面玲瓏でなくてはいかぬ、さういふ意味を知らぬから、人が往々、唯々空言で世を瞞して行く事があつた、言はゞ、老子の如きも空言である、大道廢有仁義といふが、大道といふ大

の字が何處から来て、何が大道だ、精微の極を究めた所で、道といふ名が初めて現はるゝものであるから、道といふものには、小もなければ大もなし、さういふやうな譯のものである、.....

髮ノ毛一本程疵ガツカハ、髮ノ毛一本程天地ニ疵ガツク譯ナリ、疵ツカハ氣全カラズ、全カラサレハ飢ニ養氣者、此ノ理ヲ知ラサルベカラズ、粗ヲ見テ精ヲ忘レ、大ヲ見テ小ヲ遺ス、是豈道ヲ知ルトイフベケンヤ、蓋道外無物、物外無道、物ヲ全フスルハ、道ヲ全フスル所以、道ヲ全フスルハ、物ヲ全フスル所以ナリ、曾子曰、啓予手、啓予足、詩云、戰々兢々、如臨深淵、如履薄氷、今而後知、免夫小子ト、君子ノ戰兢、敢テ毀傷セサランヲ恐ル、ハ、其天ヲ全フセント欲シテナリ、天ヲ全フスルハ、則人ヲ全

フスルナリ、人ヲ全フスルハ、天ヲ全フスルナリ、天人本二物ナシ、人則
天、天則人、人ハ小天地ナリ、天ハ大人物ナリ、故易曰、夫大人者、與天地合
其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶、先天而天弗違、後天
而奉天時、天且弗違、而況於人乎、況於鬼神乎、ト天人本同カフズンバ、何
ツ其德ヲ合スルヲ得ン、何ツ先天而天弗違ヲ得ン、何ツ後天奉天時ヲ
得ン、夫之ヲ知ラズシテ、道ヲ論シ修養ヲ語ル、是杜撰孟浪ノ倫ナリ、未
其可ナルヲ知ラサルナリ。

この詩は、一日諸子類を讀む時に、其の一語から感して作
つたものである、其の諸子類の文には、これまで見ゆて居
らぬかなれども、蒐も角、うれから意を推して永歎して、作
つた詩である、……………

觀道如觀水 觀沼水洗瀾

沼は、沼たけに、洗瀾と、水がちよほつと波立つて居る、うこ
で、沼といふものは、全く小さいでもあるまいけれども、今
は、ちよつと小さいものと仮定した話である、うれから

之河之江海 洪波又森漫

河といひ、江といひ、海といふは、固と支那の河の名である、
日本では、潮の無い處を河といひ、潮のさしひきする處を
江といひ、さうして、潮水の滙ゆる所を海といふ、うれは、こ
ちらにして、宜いが、支那人が見れを、やはり、黄河楊子江、
うれから上海と斯う見るであらふ、うこそ、河にゆき、江に

ゆき、海にゆきて、水を觀れば、汪洋として、大きい波が浪立つて居る、しかるに

曷知津涎液、孰爲非水湍

つはきでも、よたれでも、水でないといふことはない筈だ、ろこで、沼の水も水、ろれを道に譬ふれば、道、江海の水も水であるが、ろれを道に譬ふれば、道だ、つはきでも、よたれでも、矢張り同じ水であるが、ろれを道に譬ふれば、道である、

觀道奚異焉、源歸若爲殫

皆源があつて歸着する所がある、其道の源歸は、どうして殫まるといふものである、今、鼻息と雖、蒸發して雲霧とな

り、雨となつて、復た本の水となりて落ちて來る、ろこで、鼻息でも、津涎液でも、沼、海、江海でも、孰れか水にあらざらん、大きくも、小さくも、水でないといふことはない筈だ、ろれを譬ふれ、大も、小も、同じ道だ、小さきひから、道に非ずといふことはない筈だ、

觀道一身中、忠孝豈異端

道を一身の中に觀てみるに、或は忠の心があり、或は孝の心がある、異端、外道でなくして、是が則ち一身中の道であらう、

觀道一心裏、定懷忠勇肝

肝の字は仮り物で、勇忠の心を懐くといふと同じことである。支那では、膽大忠膽義膽なといふ語がある。日本の俗語でいへば、忠勇の膽玉を懐いて居ることだ。是も道であらう。

言其室家狀 八口團樂歡

家内に居る有様を言つて見れば、八口團樂として歡ぶ、八口は多勢でもなく、少いでもなく、中等で言つたものである。十人居る處もあり、五人居る處もあらうが、八人は中等の處である。團樂と父母妻子環坐して歡んで居る、是も道であらう。

推之天下事 孤兒弗可護

天下の孤兒と雖、護つてはならぬ。誠の心を以て、天下の孤兒でも保護して行かぬはならぬ。是も道であらうと言つたものである。うこそ、道といふものは、固と出る所は、どこかといへば、天である。天といへば、何もない蒼々たるものかと思ふが、

曰天而曰帝 昭明不可于

帝と言つて見れば、上帝といふものもあらふ。うの上帝の昭かにして居ることは、一寸も于かさねぬで、争はれぬ道理があるものだ。天は蒼々といふて、青い色に見ゆる處は

か。で。ない。何。處。も。皆。天。で。あ。る。地。の。中。に。人。が。居。れ。ば。人。の。居。る。處。が。天。で。あ。る。う。の。天。の。心。は。昭。々。と。明。か。で。于。さ。れ。ぬ。

曰。帝。而。曰。父。父。子。仁。愛。看。

天。帝。と。い。へ。ば。懼。い。も。の。う。や。う。で。あ。る。が。天。父。と。い。へ。ば。さ。う。で。な。い。や。う。に。聞。ゆ。る。威。嚴。は。か。り。が。天。で。な。い。仁。愛。も。兼。ね。て。と。さ。る。う。こ。で。帝。と。い。ふ。て。又。兼。て。父。の。場。を。有。つ。て。萬。民。は。天。の。子。と。し。て。仁。愛。の。心。を。以。て。看。て。と。さ。る。

天。父。既。ニ。下。民。ヲ。子。ト。シ。テ。仁。愛。ノ。心。ヲ。以。テ。庶。物。ニ。接。ス。何。ツ。忍。デ。人。ヲ。シ。テ。地。獄。餓。鬼。畜。生。ニ。陥。レ。ン。若。シ。坐。視。救。ハ。ズ。ン。ハ。不。仁。モ。亦。甚。シ。豈。天。父。ト。稱。ス。ル。ヲ。得。ン。ヤ。今。人。其。子。水。火。坎。穿。ニ。陥。ル。ヲ。視。テ。其。父。母。之。ヲ。救。ハ。ズ。ン。ハ。果。シ。テ。如。何。ト。セ。ン。カ。天。ハ。群。物。ノ。祖。庶。民。ノ。父。ナ。リ。豈。忍。ン。テ。

不。仁。ヲ。爲。サ。ン。ヤ。世。ノ。所。謂。救。法。家。者。流。道。ヲ。見。ル。晦。々。不。明。自。ラ。瞞。シ。人。ヲ。瞞。ス。詎。ツ。其。本。ニ。歸。ラ。ザ。ル。然。ト。雖。是。レ。微。權。ナ。リ。莊。周。曰。有。天。之。道。有。人。之。道。ト。天。人。ノ。別。ヲ。知。ラ。サ。ル。者。ハ。未。共。ニ。語。ル。ベ。カ。ラ。サ。ル。ナ。リ。然。ラ。ズ。ン。ハ。其。弊。恐。ク。ハ。底。止。ス。ル。所。ナ。カ。ラ。ム。

天地攸窮極。此理匪寡單。

天。の。果。て。ま。で。こ。の。道。理。が。盡。さ。る。單。な。る。と。い。ふ。こ。と。は。な。い。何。處。ま。で。も。遍。く。し。て。充。ち。て。を。る。も。の。で。あ。る。こ。の。曰。天。而。曰。帝。よ。り。以。下。は。道。の。大。な。る。所。の。話。で。一。身。一。家。の。處。は。道。の。小。な。る。所。の。話。で。あ。る。若。か。し。大。な。る。話。は。か。り。を。し。て。家。内。の。こ。と。を。畧。し。て。宜。い。か。一。身。を。畧。し。て。宜。い。か。と。い。へ。ば。道。は。一。身。か。ら。始。ま。つ。て。居。る。も。の。な。れ。ば。道。は。大。小。無。い。

と言はねばならぬ、大小なしといへば、決して一身一家の
ことを省畧して話さずに置くことはならぬ筈である、

延及無邊外 推論此不難

ろこで、無邊無量といふ處の外までも、道といふものは違
ふかといふと、さうでない、すべて我が心の如きものであ
るから、何も違つたことはない、ろこで我々が、我が子を愛
すれば、人は天の子であるから、天も亦人を愛するといふ
ことが分かる、さうすれば、無邊無量の外の人と雖、外の天
の心と雖、推論することこれ難からず、丁度、我々が居るこ
の場合と同じことである、

道ハ遠近高下大小表裏ナシ、畢竟無量無邊ナリ、已ニ無量無邊ナリ、故
ニ南極ノ南北極ノ北、亦我が環堵ノ坐上ニ異ラサルナリ、極外ノ天、亦
陰陽寒暑、極外ノ人、亦四肢九竅、之ヲ以テ之ヲ察ス、推論何ノ難キカコ
レアラム、故ニ孔子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、ト道ニ薄厚ナシ、
何ツ蠻貊ト否トヲ分タシ、蓋僅ニ窒碍アレハ、以テ道ト爲スニ足ラサ
ルナリ、沼河江海、乃至津涎液、均ク是レ、濕性不變ノ水ナリ、水何ツ大小
ヲ分クンヤ、津涎液ノ濕性不變ノ水タルヲ知ラバ、亦必ズ、沼河江海ノ
同シク、濕性不變ノ水タルヲ知ラシ、何ツ、之海之江之河之沼ヲ待テ、初
メテ知ラム、一身忠孝、一心忠勇、八口團樂ノ道タルヲ知ラバ、八極ノ外
ヲ推論スル、何ノ難カコレアラム、何ツ必シモ、八極ノ外ニ栖遯來往ス
ルヲ待テ、而後ニ初メテ知ラシヤ、故ニ國書古事記曰、小名昆古那神、此神
者、足雖不行、盡知天下之事神也、ト老子亦曰、不出戶知天下、不窺牖見天

道ト夫レ之ヲ知ラズシテ而シテ道ヲ觀ント欲セハ其影ヲ追ヒ風ヲ捉ヘサル者果シテ幾何ツ。

庸人還說道々尊四民痺

凡庸な人が道を説くときは道を廣大無邊なるものであると言つて人の寄りつかれぬものゝやうに言ふ、こゝで四民が惑ひ痺かれて仕舞ふ、

焉知夫婦愚與道可參觀

それらの庸人輩がどうして知らる愚夫愚婦の痴話をするも道の中であるそれも道理の外つれたことのないものである、しかして、それも道の中である、矢張り道を論ず

る部中に合せて見なければならぬ、

孔丘近取喻 喻近人永歎

そこで孔子が能近取譬可謂仁之方也已といはれたことがある、そこで極近ひ喩を取りて、夫婦の愚らか持て来て、是が道なりと言ふ、そこで御尤と言つて、萬人が永歎して聞く、若し道が高大で容易に由り行ひ難いものならば、造物者が道といふものを見せかけて人を困らせるのである、が、さういふ道理はあるまい、

道無有大小 水無有狹寬

道は、小の大的といふことはない筈である、何事か、人間世

界のこ。と。で。道に。外。づ。れ。た。こ。と。が。あ。ら。ふ。道。は。須。臾。も。離。れ。ら。れ。ぬ。も。の。で。あ。る。道。也。者。須。臾。不。可。離。可。離。非。道。也。と。い。ふ。て。あ。る。道。に。小。大。あ。る。な。し。水。に。狭。寛。あ。る。な。し。水。に。狭。い。寛。い。と。い。ふ。こ。と。は。な。い。一。滴。の。水。も。水。で。あ。る。大。海。の。水。も。水。で。あ。る。水。の。性。質。は。違。は。ぬ。

天子嘗詩アリ云九州無乃狹環堵返爲寛ト九州ハ至寛ナリ今還テ狹

トナス環堵ハ至狹ナリ今還テ寛トナス深ク個中ノ趣ヲ得ル者ニ非

ンバ何ア這般ノ消息アルヲ得ムヤ

以盆設爲沼 島山轟嶮航

うこそ、盆の中の水を盛りて、沼となし、石一つ持て来て入

るれば、一の島山が出来て、噴岫と轟立してをる。

有魚環遊之 浮泳至歳闌

こ。れ。は。小。さ。い。島。山。小。さ。い。沼。で。あ。れ。ど。も。其。中。に。金。魚。を。浮。か。せ。ば。大。海。の。島。山。で。も。遊。き。環。る。や。う。な。心。持。ち。で。圍。々。洋。々。と。自。得。し。て。浮。び。泳。ぎ。て。歳。の。暮。れ。る。ま。で。も。樂。ん。で。を。る。我。々。貧。家。と。雖。も。一。室。の。内。に。居。て。老。の。將。に。至。ら。ん。と。す。る。を。忘。れ。道。を。樂。ん。で。居。れ。ば。狭。い。處。に。居。る。と。雖。も。道。を。盡。し。て。居。る。と。言。つ。て。も。宜。い。も。の。で。あ。る。丁。度。金。魚。が。盆。地。に。浮。泳。し。島。山。を。環。遊。し。て。自。得。歳。闌。に。至。る。と。同。じ。こ。と。で。あ。る。こ。れ。が。此。の。詩。の。主。旨。で。あ。る。.....

教。法。家。ら。し。い。者。は。大。抵。虚。言。を。以。て。人。を。欺。く。聊。自。分。が。神。
に。仕。へ。て。居。る。と。人。を。畏。か。し。て。道。は。廣。大。と。か。何。と。か。言。つ。
て。人。を。愚。に。し。て。し。ま。ふ。何。ぞ。知。ら。ん。夫。婦。の。愚。も。道。の。部。中。
に。違。ひ。な。い。も。の。で。あ。る。を。う。こ。は。豫。て。屈。原。の。語。を。引。い。て。
話。し。た。こ。と。が。あ。る。其。大。無。外。其。小。無。内。で。道。と。い。ふ。も。の。は。
教。法。家。な。ど。が。言。ふ。や。う。に。區。々。た。る。も。の。で。な。い。.....

孟子曰、道在爾、而求諸遠、事在易、而求諸難、ト、鳶飛戾於天、魚躍於淵、頭上
脚下皆道ナラザルハナシ、道本ト近キニ在リ、此故ニ君子ハ遠言ヲ察
シ、蕩蕩ニ謀ル、道大路ノ如ク然リ、豈知リ難カラムヤ、豈山リ難カラム
ヤ、而シテ、人遠テ之ヲ遠キニ求ム、迷溺シテ途ニ歸ラズ、此故ニ、老聃云
ヘルアリ、其出彌遠、其知彌少、ト、世人之ヲ知ラズ、高遠ニ馳セ、艱艱ニ求

ム、亦察セサルノミ、教家ノ輩、廣舌漫言、糊塗人ヲ眩ス、何ゾ知ノ、三家村
裡ノ漢、痴語情談、畢竟悉是、自家ノ面目、本地ノ風光ナルヲ、觸目是レ道
々、豈人ニ遠カラムヤ、道、豈人ニ遠カラムヤ。

まがこ見し
こもろのまがな
大器日
八十福日さば
名つけけらしも

精神教育 終

附 錄 (二)

蒼海先生詩文

先生、學問淵博、三教ノ源ヲ究メ、天人ノ蘊ヲ窮ム。
故ニ、其ノ文詩、閎肆幽玄、奇闢古奧、魏晉ヲ超駕シ、
漢秦ヲ凌轢ス。世固ヨリ、旣ニ定論アリ、復饒舌ヲ
要セサルナリ。今豫テ聞知スル所ノ者ニ就キテ、
專ラ、性道ニ關スル詩文若干編ヲ摭録シテ、茲ニ

附記ス。蓋是、九牛ノ一毛、大海ノ一滴而已。雖然、諷
誦咏嘆、優柔饜飮、氷釋理順スルニ至ラバ、則夫、或
先生ノ門戸ヲ窺觀スルヲ得ルニ庶幾乎、而シテ、
是、編者ノ微衷ナリ。

贈何如璋書 何如璋批

何君閣下、予不足道也。數喪兒息、又喪妻、氣魄蕭颯、乎索、白髮離
々垂齒、脫猶能餘者、前齷三片、疎々乎弱、近來且又數病、々則
感冒、鼻酸、々乎獨有憂、則成愁、々則成嘆、々則成嗟、々則慷慨、
々々則咏吟、自慰、自閣下觀之、是特枯骨之憐悲矣。然予謂萬

物不能自道悲。人但能道悲。愚者不能自道悲。賢者但能道悲。
天所以錫於人。是性發而為情。故能悲于君。則成忠。能悲于父。
則成孝。能悲于兄。則成悌。能悲于弟。則成友。能悲于子。則成慈。
能悲于國家。則成仁。能悲于難。則成烈。能悲于朋友。則成信。能
悲寡妻。則成和。易康樂。且夫四海困窮。堯悲也。堯悲而天下樂。
南風之薰。舜悲也。舜悲而我民之慍解。叢脞。臯陶悲也。臯陶悲
而帝歌載得矣。反之。則特煬帝之行也。吾因念之。禹悲而得之。
桀弗悲而失之。湯悲而得之。幽厲。皇父。番家。伯仲。允聚。子蹶。橋
艷。妻弗悲而失之。穆公悲而得之。始皇。斯高。二世。弗悲而失之。
悲與弗悲也。周公悲于東山。而三監獲。孔子悲于獲麟。而春秋

作。季子悲于吳。而太伯享祀。子房悲于韓。而千斤鐵椎。高祖悲于時。而三尺劍。韓信悲于代。而漢大將。夫悲而竟于悲者。豈不悲哉。李綱悲于貶竄。岳飛悲于誅戮。東坡悲于詩。孫叔敖之祀。悲于優。蕭望之何禍。李廣何禍。周亞父何禍。而借悲。范蠡悲于片舟。子胥悲于鷗夷。留侯悲于辟穀。高帝悲于黥布。于胃頓。子陵何悲于釣。梁鴻何悲其歌。陶淵明常悲于酒。詩由是推之。古之淑人君子。聖主賢臣。忠臣孝子。義夫烈婦。順弟義孫。大抵能皆自悲矣。天悲而日月照明。地悲而雨露通施。鬼神悲而保佑命之至矣。然則吾獨平生有一悲而可也矣。性情文章。非二也。固謂典謨堯舜禹臯陶稷契夔諸君。性情文章也。誥周公成王

召公康侯。性情文章也。若此則上書百篇。唐虞三代君臣性情文章也。詩三百。商周人性情文章也。論語二十篇。孔子及諸弟子與其門人性情文章也。孫子孫子性情文章也。下於是則晁錯能作文章。滿篇皆性情。漢文之元祖也。若賈誼則稍有作意。故弗悲而曰悲。不則何事之痛哭流涕。長太息也。司馬遷班固楊雄則蕩學者之通弊也。若道不然。則何乏於要理也。韓退之以下。大抵皆是矣。學馬遷而不成者矣。伯夷傳何要理也。朱文公之言。純乎純。君子也。學庸二序盡矣。註釋則僻矣。僻於學之故也。賈誼同病。且夫一部過秦論。作何用。宋伯紀言似矣。未盡何則。關於威勸之氣也。然片言隻句無假辭。與之同病者。漢劉

向彼則精於事而此則明於理矣。是皆時之名大夫德義風采同觀向也。果而誦味乎語氣而可知。凡人有一長則有一短。惜矣。馬遷縵仲舒舒公孫野柳子簡東坡蕩韓子氣弗舒詩蒙要皆僻長短之譬也。仁者言霽如義者言侃如智者言昭如和敦言睦如沉潛言裕如慈悲言悲如高明言克如豁言洞如略言簡如周密言綿如敬義言重如聰達言益如訓導言切如諷諭言規如威武言勁如推測言致如交際言班如敬畏言慎如祈請言要如寓言泛々例言比々辯言切々理言着々厚言篤々大言洋々而抑情者之言婉如恬如引如蕩如暖如然則吾言如何道悲而未已者矣。且夫朝鮮之事物議紛紜予常患之朝

鮮賓客魚允中臻迎之予從容語次問曰昔日欲以船請命于貴國公能知之乎允中曰知予曰恨乎允中曰否予曰欺也貴國外托修好內實侮予允中曰非予曰貴國娼妓侍命于樊國人必爲所刑是非修好規允中曰是典予曰未修好前之規也哉允中曰新規予曰是讐予矣夫修好者合二國人民而爲兄弟行也且人恕於內國而嚴於外國是非讐予而何允中弗答予曰得無乃恨予關白秀吉乎允中曰恨予曰予亦深恨貴國如何彼豐臣者非擅命也曩者蒙古人陷我對馬陷我壹岐掠我松浦轉而冠于博多貴國人常爲之先鋒是深恨也其後我竊盜掠于貴國海岸而貴國弗遣一問使于我直奪我對州凡

若是者二、徵秀吉則我地長入于貴國矣、現對州載于貴國地理誌、且秀吉是復讐之舉、非擅伐之師、且吾又欲問貴國之弗釋憾者、秀吉之時、貴國八道皆降、二王子在我手、獨亡王殿下遁于平壤之奧、明師來而民皆爲之蹂躪、七年、且沈惟敬何者、二國兵結而不解、則明任用實誤也、且我返二王子、唯貴國之命、我無罪、吾欲問貴國之弗釋憾、敢問我天皇即位告、征夷府廢止告、對州藩停止告、太政官設置告、外務卿委任告、外務書記諭書、外務卿告、太政大臣告、釜山浦在留書記諭書數通、宗對州諭書、對州前委吏諭書、同通事諭書、釜山浦在留館吏撤去之告、皆漠而不省之、宜且在見問條、始者吾謂貴國受清朝

之封册、今則大朝鮮王國、權常在其手、無復明師來援、則吾入如何、其以予爲英雄乎、今夫不共同福、是不能共同禍、修好無用也、是一時言、私入閣下耳、何君閣下、任滿而歸國乎、與交三年、誼厚也、意者方今世界紛爭之時、強弱時有、盛衰興亡不齊、近聞某大國有征服朝鮮議、是否如何、爲國忠孝大節、勉焉、吾老無日、悲之又洞々續々來也、種臣手書再拜、

將古來治功學術經濟文章貫穿於一悲字中、筆々變化語々精鍊、汪洋放恣、肆博大雄深、此爲宇宙奇文、至文當于諸子集中求之、秦漢以後人不能復作此種文字矣、先生懷此偉抱、故滿腔悲憤、觸緒紛來、再三披讀、不覺俯仰

自失先生其殆移我情乎辛巳十二月十一日燈下何如
璋謹識

放筆自寫其胸中言所欲言闕達魁崛似韓非子又似荀
卿黃遵憲拜讀謹識

籠天地於形內挫萬物於筆端是真情是大文章具此精
能此直可於諸子外別立一職癸巳秋秒元和汪鳳藻拜
讀並識

日本之日本序 張滋昉批

夫知日本之爲日本而後日本人之爲日本人其義端明夫日

本。一。族。宗。支。之。國。其。宗。者。常。爲。君。主。而。支。者。常。爲。臣。民。者。日。本。
之。爲。日。本。而。又。日。本。人。之。爲。日。本。人。孰。疑。其。道。固。有。君。臣。之。義。
與。父。子。之。親。存。焉。今。有。狂。夫。於。此。雖。欲。爭。君。臣。之。義。而。忍。廢。父。
子。之。親。哉。不。忍。廢。父。子。之。親。而。家。道。成。焉。故。以。家。道。治。國。者。日。
本。人。苟。畢。斯。義。則。在。日。本。人。亦。可。敬。也。日。本。之。爲。日。本。亦。可。言。
也。秋。田。遠。山。君。著。日。本。之。日。本。意。實。在。於。此。歟。意。實。在。於。此。歟。
副島種臣序

雖短篇而文字之曲折變化若濤翻浪捲層出不窮振聳
啓聵所以維世道人心者其在斯乎張滋昉謹識

和歸去來辭 並序

予閑居有慕靖節先生高風蓋其時云即和所著歸去來辭以質焉于時戊寅正月十有五日以質焉于時戊寅正月十有五日以質焉于時戊寅正月十有五日以質焉

歸去來兮無田無廬將焉歸既無豐懽憾意念又無營葺纏愁悲牽闔族而行旅携僮僕以攀追就鵲巢而棲止夫豈計較是與非聊偃息而得所禮雖簡而裳衣重福德之無盡財日散而未微無復貴客足可走奔且循俗禮豁然開門書畫掛壁劍書俱存有時呼茶好匪酒樽屏戚々之情容呈欣々之笑顏和語言之温々主上下之安々奚盜竊之足虞隣犬來而護關彼白雲之悠々時舒卷供仰觀顧園卉之榮枯知歲序之往還審陰

陽之盈縮撫運數之盤桓歸去來兮請且於焉優游我墨掛冠與組其去仁欲何求通幽明之至理樂天命而無憂况眞道之有證豈止洪範九疇問津有涯欲濟待舟即語人事有仲尼若言神道有孔丘閱六籍以省識不及百氏之流忘寢食而精思涉晝夜乎未休已矣夫年已半百亦失時將鞭策而超乘捷路固不可之惟吾力之不至尙子弟之可期廉耻以爲耒耜耕心田而耘耔和靖節之芳韻恭肅賦呈此詩庶在天斯有教憫予後生願勿疑

四魂歌

愛。為。重。鎧。親。為。利。兵。維。勇。暨。智。其。軍。行。々。神。靡。所。向。束。手。聽。傾。

維年。以下十二首何如璋批

維年丁丑吉月令辰敬祭皇天后土群神々與道一四靈其魂
愛親智勇至精至醇造化以來斯有生民神魂分賦若水于源
泱々洋洋々千支萬分接續流通各為川津仁洪德厚保定斯身
將修何德對揚大恩神無不見神無不聞神斯立前誰為非真
神道昭々無量無垠我謳且歌告世界人

錢子琴曰古樸深醇如讀金滕康誥

何如璋曰先生力持此說意精語詳所以救末俗之弊者

煞費苦心

四言詩

敬。之。敬。之。敬。爾。身。首。勿。謂。天。高。神。爾。保。守。勿。謂。地。卑。祇。爾。抱。負。
勿。謂。父。死。鬼。爾。左。右。爾。目。爾。耳。爾。足。爾。手。勿。敢。自。專。勿。取。罪。咎。

錢子琴曰嚴於屋漏不愧幽獨此君子自治之功然後推

已及人放乎四海說來有次序

其二

愛。之。愛。之。愛。之。不。已。四。海。同。胞。孰。非。神。子。左。之。右。之。母。彼。母。此。
其。愛。伊。何。導。以。道。揆。用。而。無。盡。惟。愛。為。爾。化。々。生。々。萬。福。千。祉。

又曰雖粟米布帛道我家常實日星河岳屹立不移

其三

正之正之爾率以正民靡不做正爾履行食民租稅豈為私榮
爾勿驕抗爾勿權傾發號出令勿俾震驚爾能自平孰敢不平

何如璋曰聖人之教如是如是

其四

人亦有言道之以德德者無佗躬行心得建中于民以為皇極
曰仁曰義懋在謹飭民之秉彝本自正直爾能有禮威來爾即

又曰雍也可使南面知此者治國猶運之掌乎

遺興

茫茫一神界無始又無終無遠近高下大道之攸同至大元無
外豈復有所窮然而人靈善亦得班其中

錢子琴曰靜與天遊動合自然

其二

螻螳作其埴勞役引同類衣食相與謀互自保親愛亦如知五
倫蟲而何乃智吾聞造化理至小元無內

何如璋曰物猶如此而況於人先生真能談名理

其三

仙是物變化此理不為無譬如蟲生翼花間常蘧々有體斯飲

食粒與芝何殊固非神明倫焉能不死乎

又曰見到語足破千古之惑造語亦奇警

其四

仲尼不得志刪述六經就五十知天命未必泣西狩朝聞道夕死何羨彭聃壽殺身以成仁豈求非鬼救

又曰氣節語亦末俗之藥石也

其五

易理說貞凶如有不貞吉唯貞常為吉未見貞凶實伯夷求得仁饑渴非所恤三仁各自取豈敢歎棄黜

又曰使君固自不凡

其六

夫婦人倫一人倫乃天倫夫婦六經中未以好色論好色豈美事淫縱而荒愒中溝媿言之敦厚古詩人

錢子琴曰三百篇以關雎為首正家而後正國作者深得

思無邪之旨

陪齊玉溪游某氏樓作詩見示即次其韻目呈

幡々齊夫子其心一休々教以著作義立言鬼神愁唐虞三代書降及百家流雖道有深淺各抱千歲憂或明極所建或審道所由或專主人事或旁寓天游勸善而懲惡微顯以闡幽文質

與時變。議論在機投。我本異鄉士。九州外九州。若問有作者。無復願低頭。有鳥曰鳳凰。百鳥亦啾々。自從寄江海。去住一扁舟。但飲齊夫子。所教其所修。相和雲中鶴。相戲波上鷗。是日報立秋。共倚百尺樓。短葛何蕭疎。劍氣自射牛。晴川揚素波。岸樹颯颯。人生一世間。奄如杯中漚。子承而孫繼。猶是為長留。化々生々德。至理可冥搜。何況精神精。磅礴非煙浮。體資土物養。宜終托荒邱。精神天賦稟。與天千萬秋。作德足可慕。有言足可求。往哲誰不爾。昔賢自為謀。乾坤一神界。四海一瀛洲。如是觀自佗。何物為蟬蛻。相唱又相和。遞歌復遞謳。大業要落落。片語莫悠悠。白日忽西傾。羲和不回驢。何不言爾志。下里良獨羞。何以

傳後世。幸復見教不。

錢子琴曰。學於古訓。乃有獲得力在此。

又曰。磅礴寸心。彌綸宇宙。目光四射。筆大如椽。黃鐘大呂之音。不同琤々細響。

何如璋曰。錯縱參橫。有五花八門之觀。

六倫

父子統所系。兄弟體所分。君臣職所建。朋友交所存。夫婦祭所供。天地與鬼神。平常五倫外。報養尤大倫。此理甚昭明。揭示四海人。

古風

伏。羲。神。農。氏。何。用。為。聖。人。仰。觀。而。俛。察。要。視。天。地。仁。堯。舜。彼。何。執。在。中。者。精。神。禹。臯。陶。贊。成。益。稷。奔。走。頻。湯。武。面。稽。若。公。且。以。認。真。孔。子。一。貫。誠。吾。學。茲。淵。源。

贈齊玉溪先生兼呈賢息梅孫 何如璋批

三世名儒齊夫子，賢息學儒亦類己。儒是前身復後身，常服儒服為儒士。夫子儒行實循々，事業自足拭目視。窮達乃能隨其宜，獨善不復圖祿仕。閒適時々賦新詩，實心實意取譬運。片語

嫌作空唐詞，而稱頭陀何奇詭。頭陀固有輪迴言，夫豈得知造化真。人與萬物各異用，萬物與人自異倫。人則主魂不主體，物則主體不主魂。平生飛行物視地，日用坐臥人對天。天地本賦善種子，人苟變惡在所噴。將直殲滅明其罰，安忍輪迴付生民。且夫天地乃初祖，付與妙機始稱父。生生化化遵規矩，親愛撫育遂字乳。夫人有腦腦有力，天地精爽任自取。取則存兮舍則亡，或為聰明或愚魯。果然輪迴生愚魯，愚魯本分學無補。天地不為此怪怪，常以聰明為神主。世上往々談妖異，閻羅諸佛不勝記。詎識是皆魔鬼類，乘其所惑呈調戲。有天地而有萬物，萬物生命系天地。風雨雲雷屬地道，周易禮經見大意。在天曰神

地。曰。祇。人。鬼。雖。聽。殊。座。位。文。王。陟。降。帝。左。右。况。下。之。者。誰。忝。廁。
仲。尼。所。慎。齊。戰。疾。齋。明。盛。服。非。詐。譎。迅。雷。風。烈。必。變。色。寧。關。閭。
羅。諸。佛。事。曰。齋。三。日。聽。其。聲。而。祭。非。鬼。為。諂。媚。推。堯。條。理。正。其。
原。真。神。乱。神。辨。易。々。頭。陀。其。如。夫。子。何。夫。子。且。勿。稱。頭。陀。更。稱。
大。儒。何。不。可。今。日。有。誰。爭。甲。科。交。淺。言。深。事。之。賊。况。我。未。交。言。
先。直。但。我。從。今。將。請。教。幸。勿。見。咎。披。心。腹。

錢子琴曰一語喝破

又曰確有實證

又曰反覆辯論至理名言絡繹奔赴足破天下之惑此謂
有功正學

又曰盡人合天呼吸可通語々皆見道之言由於養到功
深不然安能如此作々有芒醴々有味
何如璋曰以文為詩筆足以達其所見

葛仙祠 全

葛洪喜黃老隱居終其身頗能工醫術世人以為神大道亡而
仁義興黃老所言抑何論自古黃老家者流幾人能出孝子與
忠臣君不見仲尼徒常不乏仁人

何如璋曰崇論閎議不圖於短篇中得之非具大神力者
不能

真樂

窮亦樂通亦樂真樂固出窮通郭真道修得真樂存此心此身
有安着天知地知我自知行止坐臥不索莫不漠々亦恪々不
諾々亦諤々夫鐵可灼石可灼道不焦爛樂自若

齊戒

神即道之體道即神之躬以道頌人人斯靈人雖渺々道不窮
或為聖仁或明哲為義為烈為孝忠佗山之石玉可攻道與道
琢炳玲瓏尊道敬神所自重何況大命如響通是以古君子齋

戒常由衷

古人

古人不可見古道存于書仁義忠孝迹經國濟民餘有時與我
雖不合切瑳琢磨足起予平生默念精思時但見神氣滿堂區
如相論辨如教誨如警如戒如愉々翩々粲々如可即清明充
初實如虛天地之賜維其多乃命古人諗狂愚宵々神明理由
來非怪迂根本惟此道道立德不孤至單至純道之質周流六
合無終初古人非古死不死古道今道何殊乎不見彼日月星
辰循環不息乎其去道而焉如乎

神道 並序

論黃老者、以立為歸、語佛者、以無為宗、說耶穌者、以性惡為要、是皆外道、不足掛齒牙也、惟孔子專言人事、固有性與天道存焉、天者神也、神者道也、性者道之賦與也、子貢之徒不能悟之、故作此詩、

神。是。道。道。是。神。道。也。者。不。可。須。臾。離。神。也。者。不。可。須。臾。分。孔。氏。之。言。不。失。道。孔。氏。之。道。不。去。神。茫。々。宇。宙。何。所。有。但。見。神。氣。紛。細。縵。古。往。今。來。道。不。違。奚。別。古。人。與。今。人。道。以。造。人。我。有。身。神。以。頌。身。我。有。魂。學。問。思。辨。無。遺。力。雖。不。能。聖。亦。清。真。松。自。翠。梅。

自。芬。柳。自。娜。春。則。春。

孔子 沈文煢批

天。生。德。於。吾。桓。離。何。能。為。天。未。欲。滅。斯。文。文。王。既。歿。文。在。茲。大。觀。幽。明。死。生。故。知。天。為。天。真。大。知。先。天。而。天。不。違。後。天。而。奉。天。時。一。以。貫。之。豈。非。忠。受。命。如。嚮。安。我。欺。天。道。人。道。同。一。歸。五。經。之。書。萬。世。師。

沈文煢曰真知樂天畏天之理非管測者可比

黃遵憲曰孔北海之氣李伯紀之理可以蓋天地涵萬物而醉飽悠々之徒日在其籠罩中反為鳩鷗之笑也可哭

附 錄 (三)

副島大使適清概畧

夫子ノ功業ハ、世人ノ、夙ニ、景仰措カサル所タリ。
維新草創、内外多事ノ時ニ際シ、外交ノ難局ニ當
リ、列國ヲ操縦シ、強ヲ挫キ、弱ヲ援ケテ、邦家ノ光
輝ヲ發揚シ、一時、歐米ノ新聞紙ヲシテ、如今、天下
ノ豪傑ハ、日本ノ副島ト、獨國ノ比斯瑪トアルノ
ミト謂ハシメ、眞ニ古今ヲ藐視シ、坤輿ヲ濶歩ス

ルノ概アリキ。而ルニ、今ヤ、其ノ昔日列強操縦ノ手、英雄叱咤ノ言ヲ以テ、温顔懇到、後生ヲ誘掖啓發シテ、倦マズ、其ノ誠意ノ至レル、豈亦感スルニ堪ユベケンヤ。

方今、教育ノ書、汗牛充棟モ畜ナラズ、然レドモ、其ノ言、其ノ行ト合ハズ、是ヲ以テ、其ノ美言曲説モ、復タ、人ヲ興起セシムルモノアルコトナレ。夫子曰、凡、天下ニ志アル者ハ、常ニ、竊然トシテ、天地ト其ノ仁ヲ合スルモノアリト。大ナル哉言ヤ、而カモ、是レ、夫子ノ知言、必ズヤ、人ニ入ルノ深キモノ

アラントス。

茲ニ載スル所ノ適清概略ハ、明治初年、夫子、外務ニ卿タリシ日、秘露國ノ賣奴船マリヤルズ號處分ノ始末、及、遣清大使奉命ノコトニ關シ、隨行官ノ録スル所ナリ。今、問々、夫子ノ偶話ヲ補シ、以テ、餘蘊ナキヲ期ス。今ヤ、虎狼ノ國、驕暴愈加ハリ、我が外交ノ機、極メテ重シ。讀者、深省シテ、養フ所アラバ可也。

明治四年辛未之夏、大藏卿伊達宗城、旨ヲ奉シ、外務大丞柳原前光、書權正鄭永寧等ヲ率テ、清ニ適キ、大學士李鴻章ト會同シ、彼我固有外國條約ヲ基本トシテ、兩國ノ約

ヲ議定ス。
于時、岩倉具視外務卿ニ在リ、期ニ因テ、外國條約ヲ改メント擬ス、故ニ、伊達ノ成議ヲ喜ビズ、秋九月、遂ニ、召回シテ之ヲ詰ス。

冬十一月、岩倉、使ヲ奉シテ歐米へ巡歴スルニ因リ、副島種臣ヲ薦テ、外務ニ卿ヲラシメ、囑スルニ、再ビ、使員ヲ清ニ遣シ、我ノ西約ヲ改定セシ時ニ及テ、伊達ノ議約ヲ酌改スルノ間、本約互換ヲ停止スベシト言ハシムルヲ以テス。

五年壬申之春、前由ニ據テ、外務卿連署、照會ヲ繕就シ、大丞柳原前光、少記鄭永寧ヲ派シテ、李鴻章ニ達ス。

李云、夫レ、兩君、使ニ憑テ約ヲ結ブハ、國ノ大事也。故ニ、全權ヲ假シテ、先ニ、之ヲ議定シ、其ノ批准ヲ俟テ、後ニ、之ヲ互換シ、期スルコ、十年之間試シコトヲ以テス。此間、妄ニ改ム可ラザル所以ノモノハ、其約ヲ固執スルコ非ズ、兩君ノ欽命ヲ重ク、兩國ノ信義ヲ昭カニスル耳、貴國、換約ヲ停止シテ、原約ヲ改メト欲スルハ、殊ニ信義ヲ失ヘリ、余ハ、敢テ爲サザルナリ。只須ラク、期ヲ踐ミ、本約ヲ互換シ、以

テ、信義ヲ昭ニスベシ。西約ヲ改テ、此約ニ不便ヲ生セハ、別ニ、續約ヲ議シ、隨時酌改シテ可ナリ、何ゾ必シモ換約ヲ停止セシ。

此頃、柳原、京房ノ日報ヲ閱シ、琉球ノ種籍、臺灣ニ漂到シテ、上下五十四人、生蕃ニ掠殺セラレ、清國官府、僅ニ其逃レ來ル琉球人數名ヲ救留シテ、福州ノ琉球使館ニ交付シ、本國へ送還セシ由ヲ、福建總督ヨリ具奏シタル書ヲ得テ、本省ニ密呈セリ。

夏五月、外務大輔寺島宗則、特命全權公使トナリテ、英ニ適ク、六月、琉球國三司官、漂民ノ情由ヲ具狀シテ、鹿兒島縣ニ報スルニ因テ、參事大山綱良、表ヲ上テ曰、琉球ノ薩摩ニ附庸セルヤ久シ、然レトモ、今維新ニ際會シ、士族伊知地貞聖等ヲ遣シ、其ノ王尙泰ヲ説諭シ、漸ク、當今ノ方嚮ヲ知ラシム、願クハ、臣ニ兵艦ヲ假シ給ヘ、臣敢テ、深ク生蕃ニ入り、群兇ヲ殛シ、民冤ヲ雪ギ、皇威ヲ海外ニ宣揚セント。

秋七月、柳原、清ヨリ飯リ來リ、李鴻章ノ言ヲ述テ、朝議ノ決ヲ請フ。此決ヲ取ルノ間、鄭ヲ上海ニ留メ、命ヲ待タシム。副島、具奏シテ之ヲ可ス。此旨ヲ、鄭ニ飭シテ、李ニ報知セシム。于時、横濱ニヤパンヘラルド新聞、上海ニ到ル毎ニ、日本將ヲ兵ヲ

興シ、臺灣ヲ征伐セントスルノ説、老傳泊ケタリ。
 是ヨリ先。秘魯國ノ船、清ノ瑤港ニ在テ、清民二百三十二人ヲ載出シ、途中、我横濱ニ
 過リテ停泊ス、一ノ清民、夜ニ乗シ、水ニ免シテ逃ル、英ノ軍艦ヨリ救テ、其ノ
 公使ニ送リシヲ、我地方官ニ交付スルニ因テ、船中ノ土民、其ノ拐騙ニ罹リ、將サニ
 絶糧ニ入ラントス、況ンヤ、瑤港ヲ離レテ以來、船中ニ囚禁セラレ、或ハ、飲食糲ガ
 サルニ至ル、往テ、若役ニ死センヨリ、速ニ、吾命ヲ擧ラント、柩室ヲ脱出シテ水ニ
 投セリ、今幸ニ生ヲ得テ、此ノ冤情ヲ訴フ、仰キ冀クハ、恩霽、廣ク救援ヲ賜ヘト、秘
 魯國ハ、條約未済ヲ以テ、其ノ船、我が境内ニ泊スレハ、地方ノ管理ニ服セシムト雖
 トモ、此裁判ニ於テ、傍觀ノ各國公使領事等ノ内、或ハ、秘魯ノ販奴ヲ憎テ、清民ノ
 申訴スル者ヲ喜フ者アリ。或ハ、船長ヲ助テ、清民ノ訴ヲ成スコトヲ梗阻スル者アリ。
 一時紛紜トシテ措ク處ヲ知ラス。縣令陸奥宗光、關係セサルヲ主トセリ、京院之ヲ聞
 クモ、敢テ、理スル者ナシ。副島獨リ擔當シテ、朝ニ告フシ、即テ、權令大江卓ニ飭
 シテ、我國權ニ據リ、原被ヲ推明シ、斷シテ、悉ク之ヲ救ヒ、縣廳ニ收留シテ、衣食

ヲ量給シ、其裁斷案ヲ洋文ニ翻譯シテ、各國へ頒布セリ。

明治四年の春に、英國全權公使ワットソンといふが、東京に來若して、
 謁見を願ひ出でたことがあつた。從來、外國使臣が謁見する際には、
 玉座に於てせらるゝの禮式であるのを、新任のワットソンは、それを
 改められて、西洋一般の風に依りて、陛下、必ず、御立禮遊をさるゝや
 うにといふことを請求した。そこで、拙者之を拒みて、外國の使節た
 る者は、其の國に入つては、其國の禮に従ふと云ふことは、萬國公法上、
 當然のことである。日本では、立禮を御用ゐにならぬ、それとも、立禮で
 なければ、謁見せぬと云ふ意見ならむ、謁見をなさるなど、斯う嚴重に
 やつたところ、ワットソンは、一言も無く退いて、謁見もせず、その事
 は済んだ。……其後、露西亞の代理公使と、亞米利加公使とが、内廷謁見

を請はれた、その時露西亞公使は、謁見の禮義は、立禮でも、坐禮でも、日本御勝手で宜しいと云ふことを程やかに申されたから、拙者は、其趣を承認して、謁見の事を運んだ。……此際いよいよ、露國公使が参内し、陛下御引見になつた所が、意外にも御立禮を遊心された。そこで、前話した英公使は、頗る汗顔であつて、その年の五月に、この度は、辭を改めて、如何の御禮でも、苦しうござらぬから、参内謁見を御許しなされて、もらいたいといふことであつたから、拙者も謁見の事を運んだ、矢張、其の時は、陛下は御自づから御立禮を遊されて、目出度事、が濟んだ、……元來、陛下立禮を遊心すと否とは、外國代理公使など、が傲慢がましく、彼れはいふ道理の無いこと、は明白である、これは、一小事であるけれども、國家の禮義といふものは、自立せねばならぬ、自から随意に立禮を用ふるは、よいけれども、他國から強ひられて、禮を枉ぐるといふのは、甚だよくない、……此の謁見一條

から、英公使ワトソンが、日本に對して、頗る信友と爲つた、此の歳の秋初であつたが、一日急に、拙者を訪ねて来て、話すには、この節、横濱に、秘露の賣奴船が来て、支那人を非常に殘酷に取扱ふて居るが、日本國の港に於て、斯やうなことをしても、御許なされるか、どうかと言ふことであつた、そこで、拙者、其れは、尤もな御話である、直ぐに、關へて、取極めを附けませうと答へた、是れが日本外務省が「マリヤルズ」號の處分裁判を斷行した始りであつた、……

その時の司法卿江藤を始めとし、司法省の諸官員は、拙者の意見に大反對である、また、佛蘭西公使亞米利加公使なども、日本外務省の強硬處分に不賛成で、拙者に對して、忠告書を差出されたけれども、拙者は、斷然屈せず、太政大臣に願ひ出て、この賣奴船の裁判に限つては、神奈川縣令は、一切外務卿の指揮を受くべしと云ふことに決して、それから、三條公の名で「マリヤルズ」船處分のこと、一切全權を種臣に委任せ

らるゝといふ御趣旨の御親裁の御審附を戴いた。そこで拙者直ちに
神奈川縣權令大江卓に命じて、着々裁判の手續を決行させた……

八月鄭ニ飭シ、上海兵備道沈秉成ニ告シメテ曰、我國人民ヲ保護スルノ權ヲ以テ、貴國ノ
遺民ヲ救護セリ。貴國、能ク自ラ之ヲ愛マサラン乎。兩江ノ總督何璟之ヲ聞テ感發シ、
即チ、松江ノ同知府陳福勳ニ命シ、東ニ渡テ、之ヲ謝領セシム。鄭、之ト偕ニ米國郵船ニ
附シテ、橫濱ニ至リ、電信ヲ以テ本省ニ報ス。

副島、即チ、柳原等ニ令シテ、陳ヲ横濱ニ接シ、海路同載シテ京ニ入レ、延邊館ニ合テ、
款待シ、日ニ馬車ヲ驅セ、都下ノ勝麗ヲ遊觀セシム、凡ソ、官衙市廛ヨリ、人文衣食
ニ至ル、概テ、外國ヲ摸シタルヲ見テ、陳、乍チ驚キ、乍チ羨テ曰、我國政府ハ、夢
想ニモ未ダ到リ及ハザルナリト。

九月、琉球ノ使臣、入京シテ、方物ヲ貢キ、朝覲ヲ請フ。

皇上、因テ、尙泰ヲ策封シテ、琉球藩王ト爲シ、叙シテ、華族ニ列シ。命シテ曰、咨
爾尙泰、其レ、藩屏ノ任ヲ重シテ、永ク、皇室ニ輔タレト。尤モ賚賜ヲ厚クシテ、之
ヲ遣ス。尙泰、上表謝恩シ、以テ、冊命ヲ奉セリ。事皆陳福勳ヲシテ聞見セシム。

以前から琉球は支那を父とし、日本を母とするといふ兩屬で、又、我國
では薩摩の領地のやうになつて居つた。この使節が來た時、拙者琉球
は、どうも名分が正しからぬに依て、以後琉球薩王に封すといふこと
にした。これは彼等も餘程拒んだけれども、どうも承服させた。その
時琉球藩王なんどすると支那に對しても、自然、争端をひき起すや
うになるから、是迄通り、薩摩の附屬でも苦しがるまい、打棄て置くが
よからうといふやうな議論もあつたけれども、名正しからされは、事
従はずでゐるに依て、終に藩王といふことを承服させた。そこで、御前

に於て。勅諭を讀み上げて。再使節は。御承をして。歸つた。

副島延遊館ニ宴シテ、陳ヲ饒シ、贈ルニ、金漆和錦ヲ以テシ、大ニ、我國開化ノ進歩ヲ誇リ、
彼カ中國ノ大ナルヲ以テ、今猶ホ、外人ノ侮慢ヲ喫シ、其民ヲ豕販セラル、ヲ痛シ、
慨嘆シテ、已マヌ、陳曰、貴國皇上、時々龍車ニ親シテ、親ヲ羽林ヲ閱ス、福勳以爲
ク、兵強ケレバ民安シ、民安ケレバ國饒カナリ。貴國ノ雄謀、蓋シ之ヲ取ルナラン、
我國、廟堂ノ輔臣、誠ニ寡君ヲシテ亦能ク之ヲ行ハシメハ、何ソ外侮ヲ憂ヘン哉、福
勳、幸コ閣下ヲ窺ヒ、貴國開化ノ大体ヲ觀ルコトヲ得タリ。歸ラバ、具サロ、大意ニ面
述シテ、必ズ、憤啓スル處アラシメントス。

副島、大江ニ命シテ、難民ヲ、陳ニ交付シ、裁斷案ヲ與ヘテ、歸國セシム。難民涙ヲ洒
キ。跪拜シテ去ル。

解放の宣告をした時に、マリヤルスの船長は、直に逃走して、米國桑港
に往つて、其の本國へ電報で、日本政府の不法を訴へた。秘露政府は大
に怒り、日本に向て、諍論を開く決心で、全權公使ゴルシヤを日本談判
使節にして、軍艦二隻を連れてやつて來をうたどころが、途中で日本
の意氣込みがなか。嫌などいふことを聞いて、軍艦も無効といふ
ことを思ふたものか、桑港で軍艦を歸してしまつて、從者二三名だけ
つれて、米國の郵便船に乗り換へて、日本に來着した。……ゴルシヤ
が來て談判を開いたけれども、我が外務省では、始終確乎不拔で、一寸
も動かないもんだから、ゴルシヤも、奈何ともすることが出來ぬ。……
……どうか、使節の躰面丈け存しさせて呉れろと云ふ懇談があつた、
拙者、固より此處分に関して、英と露とは必ず日本に同意と云ふこ

とを十分に最初から知つて居たものだから、ゴルシャに向て、然らるゝ強ひて、貴使節の本國が、日本裁判に服せぬと云ふならむとつか、露西亞にも御訴へになつても苦しからぬと言つた。それで、ゴルシャも大に満足して、本國に報して、露西亞に裁判を請ふと云ふことになつたが、其の後、この事は終に日本の勝と云ふことになつた。

冬十月、各國政府此事ヲ聞テ、大ニ喜ヒ、皆ヲ其公使ニ致シテ曰、圖ヲサリキ、日本ノ義ヲ見テ、敢爲スルノ斯ニ至ラントハ、此裁斷ノ如キハ、當サニ全球ニ公法クルヘシト、各公使、先ヲ争ヒ、之ヲ副島ニ報シテ、其德義ヲ稱揚ス、兩江ノ總督ハ、陳ノ復命ヲ得テ、之ヲ朝廷ニ聞シ、旨ヲ奉シ、禮物ヲ致送シテ、其隆誼ヲ謝ス、所濱ハ留ノ清國商民、各自、詩ヲ賦シ、日本ノ仁慈ヲ謳歌シテ、紅繩ノ大幅ニ全書シ、恭シク、副島大江ノ宏施ヲ頌セリ。

旗が大きうて坐敷が狭いから……天井が今少し高いと、みんな伸をされるが……やはり、繻子の地に、金粉で書いたものを見ゆる、支那の美術も、なか／＼立派なものだ……指日高陞の四字か……あれは、日の高く上ぼる所を仰ぐといふことで、やはり、頌徳といふやうな意味であらふ……支那人が、日本の高義に感じて、これを贈て来た……

この事が、世界列國に、是認されて、日本の裁判が、全勝を占めた結果でこれ迄、支那海で、賣奴の巢窟と聞へて居つた澳門でも、今後は賣奴を禁止する事に定められたといふ事を、其の後、澳門鎮臺長官から、照會して来た……又、最初異議の忠告書を、差出した、佛國公使、米國公使も、自分の考は、誤りであつたことを、悔悟して、佛國公使の如きは、最初

差出した書面を取消して呉れど、拙者に對して、懇に謝せられた。……英國でもこの影響で、向後凡そ外國船の賣奴を救解處分するには、日本のマリヤルズ裁判の法を以て、英國の法とすべしと云ふ様な主意の訓令を、東洋各地の英吉利裁判所に、向てそれゝ通告して來た紙である。其旨附の寫を拙者持つて居たはづだ。……是は些細なことでながら、日本の爲した事と外國が異似ると云ふことは、殊の外喜をしいことであつた。此一件から後、亞米利加の公使は、無類、日本最負になつて、殊の外日本の爲めに諸事に注意して呉れた。その公使の名はデロングといふて、布哇公使の職務をも兼帯して居られた。それで、小笠原島を日本の物を認むると云ふこと、布哇を日本に合併することを周旋すると云ふて、専ら注意し、且つこの事をも計畫して居られたが、其後拙者も辭職をする、デロング公使も本國に歸られて、布哇合併のことも悉く立消るになつて仕舞つた。……

斯やうな、手強い處分をするには、何を待みにしたかと問ふのか………
………待みにするといふて、何んにも別には無かつた。唯その時分、日本の外務卿は、殊の外正確な人であるといふことを、各國に信じて居つたものだから、正義をつき透すことが出來たのであらう。各國公使も心服して居つたものだから………

此頃、海陸軍ノ士、沙上ニ偶語シテ、朝命ヲ待タス、自ラ、生蕃ヲ討ント謀ル者アルヲ聞キ、副島、之ヲ憂フ、乃チ、勸諭シテ曰、壯心義氣、我君上ノ爲メニ非サルナシ。若シ、名ヲ正クシテ之ヲ征セサレバ、寇ト等シキ耳。幸コ、暴虎馮河スル勿レ、稱臣之ヲ謀ルニ、慮ルベキモノ、三ツアリ。外國、臺灣ヲ睨視スル久シ矣、一也。清國、僅ニ半信ヲ治テ、自ラ全有スト謂モヘル、二也。生蕃ノ野性、勝ツコトヲ好ミ、死シテノ後ヲ負トス、三也。種臣、願シハ、外務ノ權ニ據テ、此三慮ヲ除キ、而シテ后、

専ラ、諸君ノ力ヲ用ヒ、此地ヲ取テ、我有ト爲シ、永シ、皇國ノ南門ヲ鎮メシコトヲ、此輩、之ヲ聞キ、始テ過激ノ氣ヲ慰ム、箇中或人曰、既ニ討ツ可ラスンハ、彼地ニ漫遊シ、責メテハ、琉民ノ骸骨ヲ拾ヒ得テ歸ラント、不亦真情絶語乎

元來、臺灣の東の方半分は生蕃で、支那の命令の及ぶ所でないから、曾て、亞米利加が生蕃を撃つたときにも、支那は何にも關係しなかつたといふことを、拙者兼て、支那の舊物を讀んで知つて居つたに依つて、直に其生蕃を撃つといふ説を立てた處が、やはり支那との關係があるとの説が、やかましく出て、結局臺灣を撃つには、支那の承諾を得なければならぬといふことになつた……………

米人李仙得ナル者、前年、清國厦門ニ總領事アリシ時、米國商船、生蕃ノ地ニ漂到シテ、掠殺セラレシヲ以テ米國政府軍艦ヲ發シテ罪ヲ問ヒシニ、生蕃半クシテ破ル可ラス、兵ヲ取メテ回ル、後ニ、李仙得命ヲ奉シ、自ラ、生蕃ノ牡丹社ニ入テ、會長寬其卓ヲ説諭シ、約ヲ結ヒ、以後、米國ノ船漂泊セハ、當サニ紅旗ヲ挿スベシ、爾等、之ヲ望マハ、決シテ、害ヲ加フ勿レト責ム、會長遵服シ、篋食壺漿、以テ送ル、李、此功ヲ奏シテ、南米ノ公使ニ叙セララル。

此頃、李、厦門ノ任ヲ解キ、路ニ横濱ニ次トル。
副島、之ヲ米國公使「デロング」ヨリ聞キ、李ヲ邀ヘ、共ニ語ル、半日ニシテ、相見ノ晩キヲ恨ミ、遂ニ、伐蕃ノ策ヲ畫定セシメ、之ヲ、朝廷ニ上ツテ、米國政府ニ請テ、我顧問トナシ、後ニ、陛見ヲ得セシム、勅シテ曰、朕カ民ヲ親ニスルノ意ヲ體シテ、其選陝ヲ靖ンセヨ。

副島、疏ヲ上ツテ曰、外人ノ台灣ヲ覬覦スル者ヲシテ、敢テ、我王事ヲ妨ケシメズ、清人ヲマテ、生蕃ノ地ヲ甘讓セシメ、土地ヲ闢キ、民心ヲ得ンコト、臣ニ非ンハ、恐ク

ハ成ス處ナカラン、請フ親ヲ清ニ適キ、換約ヲ藉リ、以テ、北京ニ立入り、各國公使ヲ説倒シテ、其娟疾ヲ絶チ、清ノ政府ト、謁帝ヲ論スルニ因テ、告クルニ、伐番ノ由ヲ以テシ、其經界ヲ正フシテ、半島ヲ開拓セン、制曰、可。

征韓論といふものは、明治五年から始まつた、その由来をさつと話す
と、その頃朝鮮では、専ら大院君が政事を爲て居たが、此の人頗る攘夷
主義を持つて居つて、我が國から、御維新の通知をすると、その返答に、
朝鮮は、徳川大君あるを知つて、日本天皇あることを知らぬ、そのやう
な者と交際はせぬ、又官吏は、宗對馬守より外は、交際せぬ、外務卿何者
ぞ、といふやうな譯で、幾度通知しても、書面を受取らぬ、それで、釜山在
留の我が商人に、野菜も賣らぬといふやうになつて來た、商人は續々
この事を訴へて出る、最早棄て、も置かれず、結局、朝鮮は口舌では争

はれない、軍隊を派遣して處置をするか、若くは、日本人を一切置かぬ
やうにするかの二つより外に仕方がない、といふことになつたが、こ
れにも、内閣中、殊の外異論が多かつた、朝鮮を撃つにしても、支那が後
ろから援けては居らぬか、露西亞も、暗に後ろに立つて居りばせぬか
又臺灣を撃つにも、支那が之を擁して居るであらうといふの論が多
かつた、そこで、兎も角、支那を承服させて見やうといふので、拙者が使
節として支那に行くことになつた、それ故、表向きは、先以て、大帥の
で、清皇帝に謁見するのであるが、腹には臺灣の處分を世くことと持
つて居つた、さうして、管に支那一國だけの談判をかりでなく、歐洲各
國との談判も混して居るのであつた、.....